高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門序

はじめに～主旨説明～

本シリーズは、高校生・大学生の皆さんに「高校生・大学生のための都市まちづくりをどのようにリサーチするのか？」を説明するために作られました。この序では全体の目次と内容を紹介しますが、それぞれの Chapter は独立した内容になっており、必要な Chapter だけ目を通していただいてもかまいません。

主な内容は、関西学院大学総合政策学部の先生方によって編集された『都市、環境、エコロジー』（関西学院大学総合政策学部編、2017）をベースとしています。本書は関西都市文化圏の誕生やその発展、そして都市生態系が広がりとともに次第に無視できなくなってきた様々な課題が取り上げられています。なかでも、公共空間等の性格への考察やそのマネジメントへの提言や、少子高齢化が進行するなかで、衰退しかけている都市の再興をめざして、地域資源の再評価・活用を図ったり、むしろ積極的に土地利用のあり方を変えていくための諸施策を扱っているものです。

リサーチ・スキルについて詳細な説明が必要と思われる箇所では、適宜『高等学校課題研究ハンドブック』を引用しています。そちらのシリーズもご参考にして下さい。

目次と内容の紹介

Chapter１ａ：都市デザインを考える前編（pp.1-4）
Chapter１ｂ：都市デザインを考える後編（pp.5-8）

・Chapter1 では、総合政策学部が編纂した『都市、環境、エコロジー』から、角野先生の「都市デザインとエリアマネジメント」をベースに、都市デザインについての学びから始めます。主な内容は、**都市デザイン**の枠組、**都市景観**の意識、まちと人々の**動き**、**広場**を活かすためのハードとソフトなどです。

Chapter２ａ：阪神地域の都市のなりたち～地形、水系、外国人居留地～前編（pp.9-12）
Chapter２ｂ：阪神地域の都市のなりたち～地形、水系、外国人居留地～後編（pp.13-16）

・この Chapter では、皆さんに“まちづくり”を実感し、フィールドリサーチの基本を身に付けていただくため、客野先生が阪神地域の都市化と生活環境の変化をとりあげ、近代都市への変貌がこの地の景観にどのような影響をもたらしたかを説明します。とくに焦点をあてたものは、阪神間の**近代化以前の地形と歴史**、水が形成する**地域社会と文化**、阪神地域の**都市化と阪神間モダニズム**などです。

Chapter３ａ：阪神地域の都市のなりたち２：都市化の進展前編（pp.17-20）
Chapter３ｂ：阪神地域の都市のなりたち２：都市化の進展後編（pp.21-24）

・Chapter２に引き続いて、客野先生が**外国文化**の影響（とくに神戸外国人居留地の存在）、神戸を中心とした**学問の場**（学校教育）と**山岳スポーツ**の発展、都市化と**近郊の誕生**、**関西学院の上ヶ原キャンパス移転**などをとりあげます。

Chapter４ａ：都市再生と都市デザインを考える前編（pp.25-28）
Chapter４ｂ：都市再生と都市デザインを考える後編（pp.29-32）

・Chapter４では、**都市再生**に焦点をあてて、角野先生から、成熟した都市の課題として**都市発展段階説**、都市の**再生事業**、都市間の**競争**、**エリア・リノベーション**と**エリア・マネジメント**などの説明をうかがいます。

Chapter５a：地域の良さを見直す～奈良を対象に前編～（pp.33-36）
Chapter５b：地域の良さを見直す～奈良を対象に後編～（pp.37-40）

・Chapter５は、清水陽子先生による「地域資源の再評価と市街地における新たな土地利用の可能性」をもとに、「地域の良さを見直す」ためのリサーチワークを紹介します。主な内容は、地域資源とは何か、生活観光という視点～奈良女子大での取り組み～、情報発信、取り組みから得られたもの等です。

それでは、Chapter１から始めましょう。

引用文献

関西学院大学総合政策学部編『都市、環境、エコロジー』関西学院大学出版会、2017。

2018年３月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部

都市研究には、古い写真が役立ちます。上は1929年に西宮市に移転する前の関西学院原田の森キャンパスを、西側上空から俯瞰した写真です。現在の王子公園にあたり、中央やや下よりに写っている旧ブランチ・メモリアル・チャペルが神戸文学館として現存しています。その左上に中等部グラウンドがありますが、ここはそのまま動物園内の子供向け遊園地の敷地に利用されています。右下には当時の阪急神戸本線が走っており、終点の“神戸駅”（当時）でした。その後、三宮延伸の際に支線（旧上筒井線）になります。しかし、結局廃線となって、痕跡もほとんど残っていません。

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter１ａ　都市デザインを考える前編

Chapter１は、総合政策学部が編纂した『都市、環境、エコロジー』から、角野幸博先生の「都市デザインとエリアマネジメント」をベースに、都市デザインについての学びから始めましょう。

１－１．都市デザインの枠組

都市のかたち

都市であれ集落であれ、人が集まって暮らす空間は**様々なかたち**をとります。例えば図１はアフリカのカメルーンの集落です。小屋の入り口を内側に向けて円形に配置し、防御の形を示しながら中央を**広場**として使います。同じような形はアメリカインディアンの集落でも見ることができますし、中国の福建省にある客家の円楼はこれが積み重なったものです。インドネシアのバリ島では、伝統的集落や住宅の空間構成が、日の出、日の入りの方向と、**聖なる山**として信仰されるアグン山の方角に強く影響されます[1]。高密度な土地利用が当たり前の都市空間でも、たとえばヨーロッパの中世都市では、中心部に広場をつくりこれに面して教会やタウンホール（市役所）を建てて、**求心性**を強調しました（図２）。

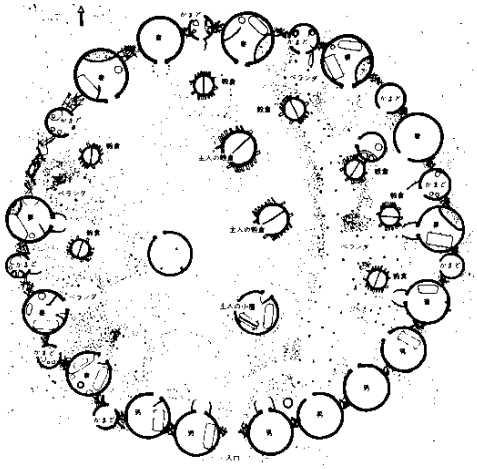


図１―１．カメルーンの集落（ベネーヴォロ、1983）

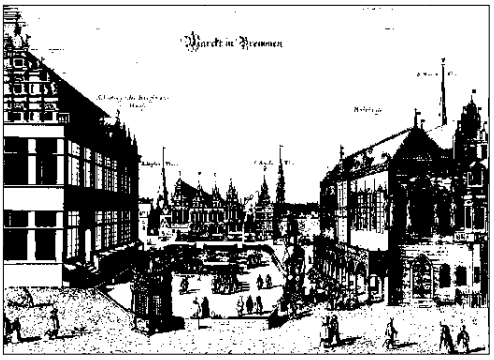


図１―２．中世ヨーロッパの都市ブレーメンの広場（ベネーヴォロ、1983）

こうした集住空間のデザインは、**機能的**な施設配置や外敵からの**防御**などの理由に加えて、聖なる場所の配置や景観などの象徴的理由で説明されることが多いようです。宗教観にもとづくデザインは、見えない力に対する憧憬と畏怖が可視化されたものともいえるでしょう。権力者や為政者の権威を強調する都市デザインは、近現代でもワシントンやブラジリアなど首都のデザインに受け継がれています（次頁の図１―３）。

ここで注意したいのは、どの時代の都市デザインにも必ずそれを支える**価値観**や**社会制度**と、実際に**管理運営**するしくみが存在してきたということです。したがって、そのしくみが消滅したり変容したりすれば、**都市の姿も変わらざるを得なかった**のです。

[1] バリ島では、中央にそびえる最高峰のアグン山（標高 3,031m）が島民の崇拝の対象となっています。そして、東西の軸とアグン山を中心とした山と海岸を結ぶ軸（島の北側と南側とで逆転）にもとづき、集落ごとの聖なる空間（祭祀空間）の配置が決まります（アルディ他、1993）。皆さんの身のまわりの町や村では、社寺や祭りの空間はどんな配置になっているでしょう？

近代都市デザインの特徴

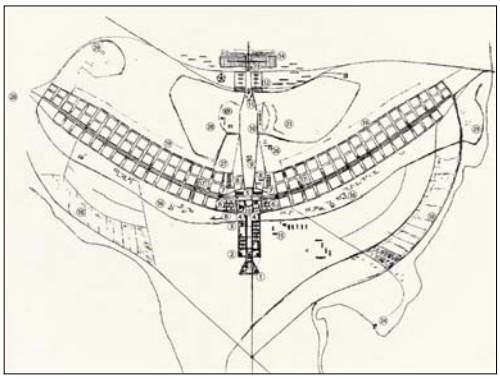


図１―３．ルシオ・コスタによるブラジリアの全体計画図（中岡・川西、2014）

近代の都市デザインは、産業革命以降の急激な**都市化**と**機械化**に対応するための空間デザインとして成立しました。さらに建設技術や供給処理施設、交通手段の近代化は、都市空間のデザインに決定的影響を与えたのです。

近代以前は石材や木材など地元で産出する建設材料がいやおうなく地域独特の景観を創り出していました。しかし、近代に入り、世界中どこででも同じような技術と素材（例えば、鉄やガラス、コンクリートのように）を使えるようになると、都市デザインも均質化し始めました（角野、2005）。また、鉄道や自動車などの交通手段の変化が市街地の空間構成を変え、都市間の関係も変えてしまいました。

都市文明が成長する過程で引き起こされた新都市建設や大規模な郊外開発の際には、様々な新しい都市デザインが試みられました。20 世紀前半、超高層ビルの建設技術が普及するとともに、ル・コルビジェをはじめとする建築家たちは、超高層建築とその足元に広がる緑のオープンスペースこそが目指すべき未来都市像であると提案し、世界中の都市で高層化と高密度化が進みました。

視点１―１．都市の構造と歴史を読みとろう！　そこに**ストーリー**（**筋書き**）を見つけよう！

あなたの住んでいる“まち”はどんな“構造”をしていますか？　朝晩、人々はどのように動いているでしょう？　そして、そのまちにはどんな“中心／核”があるでしょう？　また、あなたが通う道筋で眼にする“まち”に、どんな歴史的ストーリーが読みとれるでしょうか？　それは先人たちが意識的に創り上げたものか、それとも長い歴史で自然にできあがったものなのか？　あらためてあなたの身のまわりの“まち”を眺めて下さい。

なお、リサーチやプレゼンテーション・レポートでの“ストーリー（筋書き）”の重要性については、『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter１　リサーチ、プレゼン、レポートの枠組み」などをご参考にしてください。

巨大化する都市空間への反逆

その一方で、1960 年代以降都市空間は際限なく巨大化し、急速な新陳代謝とモータリゼーションに対するアンチテーゼともいえるデザインが次々と提案されることになったのです。すなわち、歴史的建造物の保存や、地域性を踏まえた街並みデザイン、歩行者空間の整備、緑や水を使った自然環境の演出こそが、都市デザインの使命として意識されるようになったのです。さらに、生物多様性の保全や地球温暖化に対しても、都市デザインからの対応が強く求められるようになりました。伝統的集落のデザイン原理が個性的なデザインボキャブラリーとして、新しい都市開発に導入される例も現れました。都市を生き物のアナロジーとしてとらえてデザインするアプローチもあります。「**メタボリズム**[2]」とは

[2] メタボリズとは黒川紀章や菊竹清訓ら日本の建築家・都市計画家グループが開始した建築運動です。急速な更新や人口増加などに合わせて有機的に成長する都市や建築のあり様を、生命の新陳代謝（メタボリズム）になぞらえました。従来の固定した形態や機能を支える「機械の原理」ではな

医学用語で代謝を意味しますが、１９６０年頃から、需要や環境の変化に応じて成長、代謝する建築や都市のデザインが、日本人の建築家グループから提案されました。

都市デザインについてのこうした考え方は、流行のように次々と不可逆的に取り上げられてきたのではなく、今の世界のどの都市デザインの現場でも、常に検討すべきものばかりです。また都市が成熟段階を迎えると、まったく何もないゼロの状態から夢の未来都市を建設する機会は非常に少なくなります。**蓄積され継承されてきた都市空間の特質**をしっかり読み取り、何が優先されるべき課題であり、何なら実現可能で市民の合意を得られるかを考えることが不可欠なのです。

すでに述べたように、都市空間のデザインには**機能**的側面と**象徴**的側面とがあります。また極めて多様な対立要素で構成される現実存在（実存）としての都市と、特定の美意識や理想像に基づく美的存在としての都市との葛藤が常にあるなかで、矛盾を内包したものとして我々の眼前に、都市はその姿を現わします。１９８２年に公開された映画『ブレードランナー』では近未来の都市のイメージを、新宿の歌舞伎町のような猥雑でアジア的なものとして描き出し、これがリアリティのある未来都市像として受け入れられました。21世紀の都市デザインは、決してル・コルビジェが描いた鳥瞰図的なアプローチだけではなく、地上を這いまわる虫瞰図としての視点と、多様性と矛盾をどのようにマネジメントするかという姿勢が求められるのです。次節以降では、都市デザインにとって不可欠の基本テーマに沿って、その虫瞰図的視点とはどのようなことかをお話しします。

視点１―２．“**鳥瞰図**”的視点と“**虫瞰図**”的視点

上空を飛ぶ鳥の眼からの全体を大くくりにみる視点と、地面を這い回る虫の目からのように間近に、匂いや体温も感じとれるかのようにみる視点、まちづくりにはどちらも必要かもしれません。

手近なところではグーグルマップで“まち”を見てみましょう。例えば、神戸市の北や西に広がる中山間部を“鳥瞰”すれば、なにやら不思議な文様が浮かびます。それはゴルフ場であったり、溜め池だったり、あるいは地形をほとんど無視するかのように延びる高速道路です。こうした視点はさらに**ＲＳ（リモートセンシング）**や**ＧＩＳ（地理情報システム）**の世界に発展しそうです。その一方で、現地に出向き、地べたを歩き、子細に調べるフィールドワーク、こちらも“虫の眼”として重要です。

１－２．都市景観を意識する

歴史的存在としての“まち”

現代社会での都市景観デザインへの関心は、まず**歴史的町並みの保全**に向けられました[3]。文化財保護法に伝統的建造物群保存地区が追加されたのが 1975 年、単体としての古建築の文化財的価値に加えて、個々の価値はそれほどではなくとも群としてすなわち街並み景観としての価値が、認められたのです 。この背景には、高度経済成長とともにそれまで残っていた街並みが猛スピードで消えていくことへの戸惑いと、ディスカバージャパンブー

く、「生命の原理」こそが将来の社会や文化を支えると主張したのです。

[3]文化遺産単体の保存から周囲の環境を含めての保存というステップを具体化したのが、1962 年にフランスで制定された通称「マルロー法（フランスの歴史的・美的遺産の保護法を補足し，不動産修理を促進する法律)」です。またイギリスでは 1967 年に「シビック・アメニティーズ法」が制定されました。いずれも都市計画と文化財保護を統合した法規ということができます。

ムの到来とともに観光資源として評価されるようになったこととがあります。それ以来年を追うごとに指定地区が増加し、2015 年７月時点で、全国で 110 箇所が**重要伝統的建造物群保存地区**に指定されています（図４）。初期に指定された地区の多くは、街並み観光の資源として定着したのですが、近年に指定された地区では、観光地としての総合的な魅力を発揮するには至らず、人口減少とともに空き家が増加し、その維持管理に頭を悩ますところも少なくありません。初期に指定されて観光地として魅力を発信している地区でも、世代交代などによって維持管理に支障をきたす例もあり、たとえば奈良県橿原市の今井町などでは、この問題に対して空き家を積極的に市外住民や事業者に紹介し、賃貸の手助けをする NPO が活動しています。

とはいうものの、歴史的な街並みに対する関心と評価は若い世代でも高まっており、必ずしも文化財的価値は高くなくても、町屋の保存再生や長屋の活用など、その魅力をいかしてまちづくりを行なう市民団体や NPO が全国各地で増加しています。

図１―４．重伝建地区
（鹿児島県知覧）

景観の意識とその保全

さらに２００５年に**文化的景観**という制度が導入されると、景観の構成要素に、農業をはじめとする昔からの生業や市民活動が加わり、これらの保全も景観行政の枠組みで進められるようになりました[4]。文化的景観の保全のためには、ハードの整備や規制強化よりも担い手の育成や産業振興策とリンクした政策が不可欠です。

街並み景観の整備は、歴史的な街並みから始まり、一般の市街地やニュータウンの景観整備に拡大しています。２００４年に景観法が施行されると多くの地方公共団体が「**景観形成団体**」として名乗りをあげ、景観計画を策定し始めました。これについての詳細は割愛しますが、郊外住宅地などでも景観形成地区を指定したり地区計画制度を導入したりして美しい街並み整備に取り組むようになり、それが住宅地の魅力と価値の向上につながることを開発者や住民も理解するようになりつつあります。今後は農山村部や中山間地域についても景観に対する関心が高まるでしょう。

また京都市や芦屋市、篠山市などでは、極めて厳しい屋外広告物規制を導入して市域の広い範囲での景観規制に積極的に取り組んでいます。京都市では屋外広告物規制に加えて中心部の建物の高さ規制を強化することによって、逆に既存建築などの不動産価値の増進に寄与していると言われます。これほどの規制は住民や市内企業の理解がなければ不可能で、すべての市や町で同様の規制を行うことは難しいかもしれません。

このように、景観デザインは伝統的景観やニュータウンの景観デザインといった「特殊解」へのアプローチから始まり、一般の市街地や中山間地域にも拡大しています。さらに景観を**公共財**として理解しながら、景観を単なる表層のデザインとしてではなく、産業政策や環境政策、住民活動などとの関係性をふまえて検討することが不可欠になっています。

（後編に続く）

[4] 文化財保護法の改正に基づいて制定されました、2015 年 10 月現在，全国で 50 件の重要文化的景観が選定されています

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter１ｂ　都市デザインを考える後編

１－３．まちと人びとの動き

人の動きには、一生を通じての移動（例えば、進学や就職で人は動きます）と、日常的な日々の動き（日々、学校や職場に通います）があります。まちをめぐる交通もまた歴史的な移り変わりを意識するとともに、日々の動きにも注意をはらわなければなりません。あなたは日々をすごすうちに、そうした人の流れを意識したことがありますか？　鳥瞰図のように、まちや人の動きを全体的に捉えようとする視点と、日々の動きをさぐる虫瞰図的視点を組み合わせ、理想的な人の動きを考えるとともに、その動きの“中心”として、まちの“**広場**”や“**働く場所**”、さらには“**商業施設**”や“**娯楽施設**”、そしてそれをつなぐ**交通機関**のあり方も考えてみましょう。

歩行者空間整備

片方で、現代の“まち”は**交通**を意識せざるをえません。とくに**モータリゼーション**が市街地の空間構造を大きく変えたことは言うまでもありません。道幅が自動車の通行に合わせて拡げられ、駅前にはバスやタクシーがスムーズに通行できるよう交通広場が作られました。また歩行者の安全と自動車の円滑な通行を確保するために、歩道と車道が分離されたり、ペデストリアンデッキや地下街の建設が行われたりしました。その結果、地上から歩行者が気楽に歩ける空間が減っただけではなく、駐車場が増えて、街並み景観を大きく変貌させることにつながりました。

図１―５．ボンエルフ（宮城県七ヶ浜）

こうした変化に対して、多様な歩行者空間を市街地に取り戻すことが、都市デザインの主要テーマとして認識されるようになりました。地上での**歩行者の復権**がめざされたのです。たとえば 1960 年頃からヨーロッパとくにドイツの諸都市では、こぞって都心に歩行者モール[1]が整備されました。通行を歩行者だけに限定したフルモール、歩行者と公共交通の通行だけを認めたトランジットモール、車道は確保しながら幅の広い歩道をもつセミモールが次々と整備され、この動きは一気にヨーロッパ諸都市に広がりました。モータリゼーションが著しいアメリカでも、ほぼ同じ時期にミネアポリスのニコレットモールがトランジットモールとして建設されました。日本でも国道を歩行者空間化した旭川の買物公園や、東京銀座をはじめ各地で時間を限った歩行者天国の試みが進みました。また歩行者と自動車とを物理的に分離するだけではなく、走行速度を

[1] 英語の Mall に由来しますが、本来の「日除けのある遊歩道」という意味から、アメリカなどで発達した屋根続きで複数の店舗・施設を収容する“ショッピング・モール（Shopping mall）”まで、様々な形態のモールが発達しています。

極限まで落とすことで歩車共存を図る「ボンエルフ[2]」という提案も実現しました（図１―５）。

緻密な交通計画を伴わない歩行者天国化はかえって周辺に交通渋滞を引き起こしたため、一過性の流行に終わった都市も少なくありませんが、歩行者空間の整備については現在までに、世界各地で様々な成果を上げており（図６）、自動車交通量の減少や技術開発とともに、今も様々な歩行者空間デザインや事業が継続しています。最近は京都市の四条通のように、歩道を拡幅してあえて自動車の通行を不便にすることによって自動車の入込を減らすという政策もあります。日本では商店街の活性化策の一つとしても検討されることが多いのですが、単に歩行者空間化するだけでは活性化につながることはありません。沿道店舗の魅力の向上や集客イベントの定期的開催、夜間人口の増加などの政策と組み合わせなければ効果はおぼつかないでしょう。

図１―６．ボストンのビッグディッグ（もとはここに高速道があった）

広場的空間

交通の発達は、**広場のあり方**も変えていきます。古代ギリシャの都市国家に造られたアゴラや、古代ローマのフォラムは代表的な都市広場として広く知られています。ヨーロッパの中世都市にはほぼ例外なく中心部に広場が設けられ、行政や経済、市民の交流の場としての機能を持たせられました（図１―２）。都心の大きな広場はパレードや大規模集会の場としても使われました。その他にも市街地のそこかしこに小さな広場が作られ、市民の日常の居場所となっていました（図１―７）。これらの広場は都市に不可欠な装置であり、造形的にも都市の**核**として様々なデザインが試みられました。

図１－７．フィレンツェの広場

この点についてＰ・ズッカー（1975）は、造形的な視点から広場を５タイプに分類しています。こうしたヨーロッパ広場の伝統はその後、中南米やアジア・アフリカ地域の植民都市にも伝わりました（図１―８）。また非ヨーロッパ文明圏でも、広場の機能を持つ空間は、必然的に発生しました[3]。文化的な差異はあっても、都市に集まり高密度に集住する市民にとって、**共用のオープンスペース**は不可欠の装置といえ、その必要性は現代都市においても変わりありません。

図１―８．メキシコの広場

ところがモータリゼーションの進展は、広場の様相を大きく変えました。街路の交差点

[2] 路上に駐車帯や植栽をクランク状に配置したり、路面の一部に凹凸をつけて、自動車が低速でなければ走行できないようにした歩車共存道路。オランダ語で「生活の庭」という意味。日本でも一部の郊外住宅地開発や都心の街路で実現していますが、コミュニティ道路と呼ぶこともあります。

[3] 近世の日本では、市街地に作られた橋のたもとや火除地（火事の延焼を防ぐための広幅員街路）、神社境内などが実質的な広場空間として活用されていました。

にあった象徴的な円形広場はそのまま自動車交通をさばくラウンドアバウト（交通ロータリー）となり、広場の中心部へ人が簡単に行けなくなりました。広場がそのまま駐車場となってしまった例もあります。建物の**高層化**と**高密化**は広場のようなオープンスペースへの需要を増やしたにも関わらず、モータリゼーションがこれを拒んでいったのです。

歩行者空間整備と並んで、広場を市街地にどのように確保するかは都市デザインの主要なテーマです。中世から使われてきた広場の保全活用に加えて、街区や敷地ごとにでも、土地所有者や市民の理解と協力を得ながら、広場的な空間を生み出すための工夫と努力が必要です[4]。広場的な空間づくりの対象は、狭義の広場（日本には多くないけれど）だけでなく、街路、河川敷、公園、遊休地の暫定利用、個々の建築敷地など様々です。さらに地下空間や建築の内部空間、屋上なども広場化の対象として積極的に検討されるようになっています（図１－９）。

図１－９．建築化された広場（マドリード駅）

視点１―４．“広場”をどのように利用するか？

あなたの“まち”には広場がありますか？　あなたの視点からみて、その広場はきちんと利用されていますか、あるいはきちんと管理されていますか？　うまくいっていないとすれば、その原因は何でしょう？　あなたの視点から、そうした広場＝みんなの公共財を上手に利用するためには、どんなアイデアが考えられますか？

１－４．広場を活かすためのハードとソフト

しかしながら、単に空地を用意すればそれだけで広場が誕生するわけではありません。どのような**維持管理体制**のもとに、市民のどのような行動を引き起こすのかについての緻密な仕掛けづくりが求められるのです。

プレイス・メイキングという言葉があります。直訳すると「場づくり」なのですが、ただオープンスペースを市街地にばらまくということではありません。市街地にとりとめなく存在する空地を、市民が何らかの「場所」として意識し、そこに集うための仕掛けをつくることを、プレイス・メイキングといいます。その結果、居心地が良くなり、多様なコンテンツが生まれ、賑わいが生じてまちの価値が上がっていくことを狙うのがプレイス・メイキングなのです。都市デザインの分野では近年世界各地でこの言葉が使われるようになっています。日本でも大都市はもとより空地や空家が増大する地方都市でも、中心部の活性化を目指してこの言葉が使われます。

プレイス・メイキングを推し進める代表的な組織として、ニューヨークを拠点に活動す

[4] 細かい説明は避けますが、敷地単位では総合設計制度に基づく公開空地、そのもととなったニューヨークのゾーニング条例、街区レベルでは特定街区、地区計画制度など市街地にオープンスペースを確保するための制度はいろいろあります。

るＮＰＯの「プロジェクト・フォー・パブリック・スペース（PPS[5]）」があります。この団体は 1975 年にＷ・ホワイトによって設立され、今までに世界の 43 か国で 3000 以上のプロジェクトに関わってきました。対象とする空間は、街路、広場、公園、公共建築、大学キャンパスなど様々です。

どの事例でも、市民がその場所をコミュニティの中心として再評価し活動するプログラムを空間デザインとともに提案し、行政や企業との共同作業として再生させるための提案と活動を行っています。ハードとしての空間をデザインするというよりも、市民やステークホルダーがその場所への愛着を深め、場所の価値を最大化するための支援プログラムを提案しています。日本にもこの活動が紹介され、同様の試みを行うところが増えています。

視点１―５．“都市”について公刊されているデータをどのように利用するか？

さて、フィールド・リサーチだけで“都市”を理解することはできません。例えば、その街の過去を知るためには、歴史をひもとかねばなりません。さらに先行研究を参考にしたり、政府や各種機関が発表している各種の数値資料の収集・分析も必要です。

文献等をレビューするやり方は、『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter４　テキストレビュー：課題図書を批評する」で紹介しています。また、数値資料の分析については「Chapter６ａ　リサーチ上級編１：データからどのようにレポートを作るか」や、簡単な統計スキルを紹介している「Chapter６ｂ　リサーチ上級編２：アンケート調査と統計、グラフなど」などをご参考にしてください。

１－５．引用文献

アルディ、Ｐ・鳴海邦碩・田原直樹編『神々と生きる村王宮の都市：バリとジャワの集住の構造』学芸出版社、1993。

ベネーヴォロ、Ｌ（佐野敬彦・林寛治訳）『図説・都市の世界史１・３』相模書店、1983。

角野幸博「建築と身体」鷲田清一・野村雅一編『叢書身体と文化第３巻　表象としての身体』、大修館書店、２００５。

関西学院大学総合政策学部編『都市、環境、エコロジー：教養としての総合政策』関西学院大学出版会、2017。

中岡義介・川西尋子『首都ブラジリア：モデルニズモ都市の誕生』鹿島出版会、2014。

ズッカー、Ｐ（加藤晃規訳）『都市の広場』鹿島出版会、1975。

2018年３月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部

[5] ＰＰＳのホームページ（www.pps.org）では、次のように解説しています。Placemaking inspires people to collectively reimagine and reinvent public spaces as the heart of every community. Strengthening the connection between people and the places they share, Placemaking refers to a collaborative process by which we can shape our public realm in order to maximize shared value. More than just promoting better urban design, Placemaking facilitates creative patterns of use, paying particular attention to the physical, cultural, and social identities that define a place and support its ongoing evolution.

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter２ａ　阪神地域の都市のなりたち１～地形、水系、外国人居留地前編～

Chapter２では、高校生あるいは大学初年次の学生の皆さんに、“まちづくり”を実感し、フィールドリサーチの基本を身に付けていただくため、『都市、環境、エコロジー』から、客野尚志先生の「阪神地域の都市化と生活環境の変化～都市化がもたらしたもの～」をベースに、身近な街々を対象とした“**ブラタモリ阪神地区版**”として話を始めましょう。

なお、フィールド・リサーチに関する詳細は『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter６ｃ：リサーチ上級編３：フィールド調査」、「Chapter６ｄ：リサーチ上級編４：フィールド調査（続）」などを参考にしてください。

２－１．はじめに

大阪、神戸、そしてそれに挟まれた地域の総称である阪神地域は、特に大正以降に急激な**都市化**が進み、山と海に挟まれた狭いエリアに道路と鉄道が縦横に走り、それを埋めるように住宅地や商業地区が広がり、そして臨海部には大規模な工業地帯が形成され、日本有数の**都市圏**を形成しました。この地区の都市化には他の地域とは異なる特徴があります。その一つは、江戸以前の大都市である大阪、三宮周辺から単純にスプロール状に都市域が広がったのでなく、特に明治以降に国策として発展を遂げた**国際貿易港神戸**の存在があること、そしてその神戸元町に設けられた外国人居留地と、その外国人が持ち込んだ西洋文化や思想がこの地の都市化に大きな影響を与えたことです。

図２－１．神戸外国人居留地のジオラマ、関西学院の創始者 WR・ランバスが最初に滞在した居留地 47 番地付近（神戸市立博物館）

さらに、この地域独自の自然や地形、比較的温暖で晴天が多いこと、また急峻な斜面と海に挟まれた南北に短い平地部、そして斜面から流れ出る無数の**水系**の存在も忘れることができない重要な要素です。そして、これらの自然や地理が発達させた豊かな**農耕**文化とそれに裏打ちされた**酒造**などの産業、さらにその地形や京都や大阪からの距離から、古くから天然の**良港**として発達し、水産業や海外交易の拠点として発展してきた歴史があることなど、無数な要素の時間的な蓄積の中で、多層的に都市化がすすんできたことが大きな特徴といえるでしょう。それでは、主に明治以降のこの地の都市化の様相から解説しましょう。

図２－２．当時を偲ばせる居留地 15 番地

２－２．阪神間の近代化以前の姿

阪神地域の地形と歴史

まず、明治の近代化以前のこの地の歴史について簡単に振り返ります。古来より大阪湾エリアは六甲山系から流入する河川が大量の砂を海に供給し、それが時計回り方向の海流

にのり、大阪湾全体に砂州や砂嘴を形成してきたことが知られています。そのことにより、神戸、阪神地域、大阪の臨海部においては複雑な地形が形成され、そのことから天然の良港が形成されてきました。

そして、人々は早い段階からこの地に住み着きました。現在の東灘区、灘区では**縄文時代**の竪穴式住居のあとも見つかっておりますし、西求女塚古墳や東求女塚等など古墳も現在に残されています。そしてこの天然の良港を拠点とする海人が形成する村落が古い時代から形成されていました。これらの海人は都への海産物の供給や軍事面、それから航海上の宗教行事において重要な役割を果たすのみならず、奈良時代においてはすでに当時の海外交易の担い手としても重要な役割を果たしてきたようです。

余談ですが、阪神地域の一部である武庫の地名の由来は、当時の海外交易の拠点の港であった**難波津**からみて、「向こう側」に見えたから武庫とよばれていたといいます。現在でこそ神戸をして国際貿易港という呼び名がありますが、万葉の昔からこの地域は国際性豊かな港町であったようです。

視点２―１．昔の地図を探そう、そして現在と比較してみよう！

地図は、地域の情報の宝庫です。作成された時代の姿をそのまま固定した“**タイムマシン**”といってもよいでしょう。身近なまちづくりを調べようとすれば、まず、昔の地図を探しましょう。例えば、明治 44 年の西宮市の地図を調べれば、今は一つの流路にまとめられている武庫川が、河口部でいくつもの支流に別れるデルタ地帯を形成していたことがわかります（図２－３）。そして、大正から昭和にかけて支流などをせき止め、土地を造成し、そこで得た資金で堤防をさらに上流に伸ばしていった様子も想像できるかもしれません。そんな新たな土地に作られた代表的な建築物こそ“**甲子園**”です。それでは、その武庫川改修の現場で働いていた人たちは誰だったのか？　こんなふうにテーマをどんどん広げていくと、思わぬ世界があなたの前に広がっていきます。

水産漁業について

水産漁業も長らくこの地域において重要な産業でした。江戸時代初期においては現在の灘区、東灘区の臨海部の集落は尼崎藩に所属しており、漁業は海事にまつわる一定の義務を果たす村落にのみ許可され、全ての村落に許可されていたわけではないようですが、それでも全体としては漁業の盛んな地域であったようです。明治期の漁業の記録によると現在の東灘区の漁港にお

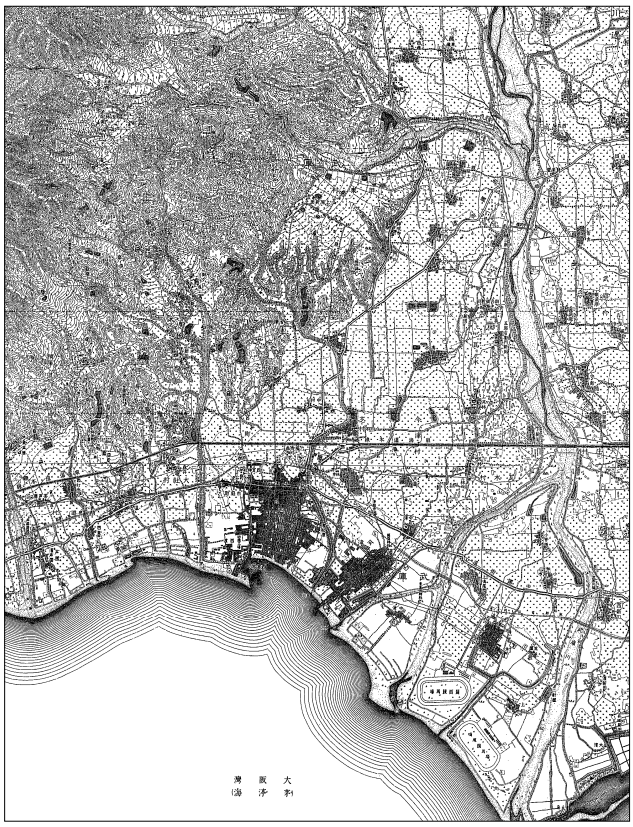


図２－３．1911 年当時の武庫川下流、デルタ状に枝分かれし、申川ではまだ水が流れています（その後、廃川跡に甲子園球場が建ちます）。現在のＪＲ東海道線と阪神電鉄は確認できますが、阪急はまだ開業していません。

この図から様々なことを読みとりましょう。

①江戸期からの河川改修を示す“新田”を探そう。
②堤防工事はどのように進んだか、考えよう。
③電車網や道路網はどのように発展したか？かつての街道筋とどのような関係か？
④宅地開発はどのように進展したか？
⑤観光・レジャー施設はどこに設けられたか？

いて、多くの鰯やジャコがとれたことが記録に残されております。そして、漁業により得られた魚を魚肥として活用しつつ、豊かな水系を背景に農業も発達しました。また、現在では近隣の明石での蛸漁、赤穂の製塩が有名ですが、蛸漁や製塩はかつては広く阪神エリアで行われていました。

さらに豊かな農業や水産業、天然の良港という性格から、江戸時代にはさまざまな商品を江戸に送り出す**拠点港**として重要な役割を果たしました。とくに、上質な酒や海産物は江戸においては上方ものとよばれ、大いに珍重されました。同時にこの地の商人たちは、江戸という巨大マーケットをもつことにより、ますます発展を遂げていきます。

水が形成する地域社会と文化

阪神地域の歴史を語る上で欠くことができないのが「**水**」の存在です。この地域における水は、二つの側面から捉えることができます。まず、地域を潤し、灌漑し、生活や産業の源を築いてきた人々の**生活の源**としての水です。もう一つは数多くの水害を引き起こしてきた**脅威の水**です。特に後者は阪神大水害など大きな災害を幾度となく引き起こしてきましたし、地域の人々は常に水の脅威と戦ってきたといえるでしょう。ただ、ここでは紙幅の関係上、前者の地域の産業や生活の基盤となり地域の文化を形成してきた水に注目します。そしてこれらの豊かな水系は都市化に伴い消失し、そして産業や文化の形すら大きく変えたのです。

明治期の阪神間地域の地図をみると、農地が広がりその間を縫うように無数の**水路**が走っている事がわかります（図２－４）。東の水路、西の**ため池**という言葉がありますが、関東地域では河川を水源とする広大な水路ネットワークが形成され、それが地域を灌漑してきました。その背景には、利根川等大規模な河川が多くある事、そして関東平野には広大な平地が広がっており、ため池をつくるには地形が不適当であり、むしろ水路をつくることの方が容易であったことがあげられます。それに対して、関西は主にため池を水源として灌漑が進められてきました。山地が多く、地形も急峻であった近畿の多くのエリアでは谷をせき止め、ため池をつくり、そこから水を引く事が多く見られました。過去の地図をみると、三田や明石、神戸北区、西区付近には数多くのため池がみられますが、阪神地域にはそんなに多くは見られないことがわかります。むしろ、東西に長い六甲山から流れ出る無数の水系をうまく利用しながら水路網を作り出して、これを灌漑や様々な産業に活用してきたようです。

図２－４．大正期の灘区周辺地図（陸測図）。溜め池が少なく、無数の水路が走っています。

水がもたらした地場産業

さて、明治期の地図をみればわかりますが、この地方では多くの**水車**がありました。急峻な六甲山から流れ出る川は水車を動かす格好の動力源だったのでしょう。これらは油絞りや米つきに用いられました。そしてこれらに使用される石臼の材料として六甲山から得られた花崗岩が使われ、まさに**地産地消**を体現していました。実はこの地域はかつて水車業や酒造が盛んであり、その経済力に着目して、岩屋や大石が後に幕府領とされた経緯が

あります。また新田開発も盛んに取り組まれました。江戸時代に水車により絞られる菜種油は特にこの地域の代表的な産物でした。材料となるアブラナは米の裏作として盛んに栽培されました。現在もその名残を残す地名（たとえば、水車谷とか水車新田など）が残されています。

またこの地は素麺の産地としても有名でしたが、それにはやはり水車を用いた小麦製粉が背景にあります。明治期に入り素麺製造はますます盛んとなったことが記録にのこされています。しかし大正時代となり電力が普及し、前近代的な水車業が衰退していきました。これに伴って、アブラナを材料とする製油、素麺の製造なども衰退していきました。今では素麺といえば播州の方が有名ですが、かつてはこの地が一大産地だったとは不思議ですね。現在では水車はほとんど残されていませんが、西宮の夙川付近に唯一過去の水車が保存されているものがありますので、関心があれば見にいかれてもよいでしょう。

さて、阪神間といえば歴史的にも**酒造業**が盛んで、とくに灘五郷[1]としてその名を広くとどろかせていますね。記録によると、享和３年（１８０３）には、大石で２５軒、新在家で２４軒、岩屋で９軒と灘だけで６０軒の造り酒屋があったとされています（灘区 80 年史編集委員会編（2011）『灘の歴史』）。その背景には、近隣に米の産地があり良質の酒米を得る事ができたことがあげられます。筆者が勤務する三田でも山田錦という酒米の栽培が当時から盛んであり、現在でも多く栽培されております。また、杜氏のなり手が多かったこともその一つの理由でしょう。阪神間地域からそう遠くない丹波地方から農閑期に杜氏として灘に出稼ぎにいくものも多くいたそうで、大変腕が良かったと伝え聞きます。

そしてなにより豊かな水です。いうまでもないことですが酒造にはよい水が多く必要とされます。六甲山の花崗岩により濾過された水は当時から名水としてしられ、酒造にも適していました。そして、精米に水車の動力が利用できたことも大きな要因です。人力と比べるとはるかに効率的で、コストも安いので盛んに利用されました。そして、天然の良港の存在です。生産された酒は盛んに江戸に送られました。特に上方の酒は品質が高く江戸でも大変評価されました。**摂津十二郷酒造仲間**という組織が１８世紀後半に組織されましたが、これには大坂、伝法はじめ池田や伊丹、尼崎、西宮、兵庫、灘等の生産者が加入していたことからも、この地域が一大酒造拠点であり、阪神地域のみならず大阪や京都などでも広く盛んに酒造がされていたことが分かります。現在でも西宮や灘の南部に酒造会社が見られますが、それはこの時代の名残なのです。

（後編に続く）

視点２―２．地元の産業の移り変わりを調べよう！

この Chapter をお読みになれば、“**地場産業**”も移り変わりが激しいのがわかるでしょう。江戸時代、酒造業は伊丹周辺から灘五郷に移りますが、それは原料としての“宮水”もさることながら、灘周辺の水車による精米も重要だったとのことです。この頃、“水”は物資の輸送や、新田開発にも欠かせませんでした。現在、関西学院大学がたっている“上ケ原台地”は、江戸時代初期、仁川の上流から水をもたらす仁川用水ができるまで、田畑も開けない場所だったのです。その一方で、江戸期に氾濫原に田畑や“まち”が広がった結果、洪水による被害もまた拡大していきます。

[1] 神戸市の東灘区・灘区から西宮市にかけての西郷、御影郷、魚崎郷、西宮郷、今津郷からなる土地。酒米や地下水（宮水）が取れ、酒造に適した気候であったり、製品の輸送に便利なため、酒造が盛んになります。

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter２ｂ　阪神地域の都市のなりたち～地形、水系、外国人居留地後編～

２－３．阪神地域の都市化と阪神間モダニズム

明治以降の近代化と都市化

それでは阪神地域の**都市化**の過程について、簡単に振り返ります。

まず、内陸部の**住宅地開発**についてです。大阪は明治以前から秀吉が都市の基盤を整備し商人の街大坂として大きく発展を遂げていました。しかし、それはいわゆる船場を中心とするエリアであり、周辺部では農村も多く見られ、今時の言葉で言うなら都市近郊農村が形成されていました。例えば、ＪＲの環状線の福島駅や野田駅周辺について、かつての地図をみるとそれぞれ福島村、野田村と記載されており、住宅の周りには農地が広がっている様子が見られます。明治維新以降、国策により神戸が**国際貿易港**として発達しましたが、当時の都市の規模としては大阪や京都と比較するとそう大きなものではありませんでした。現在、兵庫県が広大な県土を有しているのは、この神戸の港を守り、発展させるために多くの旧国を合併させて一つの県としたことが背景にあります。

さて、明治に入ったころには神戸と大阪に挟まれた阪神エリアには海岸部に形成された一部の市街地を除くと村落と農地が広がっていました。しかし、大正に入り、自然が豊かであり水や空気も清冽で、景色のよい住環境を求める層が郊外にその居住の地を求めるようになります。特に、現在のＪＲ住吉付近は別荘地としてのニーズが高く、船場などの豪商たちが多くの別荘地を構えました。当時の大阪は大気汚染や水質汚染などが問題となり、風光明媚かつ自然が豊かであり、鉄道も整備され大阪から約 20km 弱しか離れていない場所は別荘地としては最適であったのでしょう。しかしそのせいか、この地の物価がとても上昇し、地域の人々の生活を圧迫したことが記録にのこされています。

図２－５．1868 年、貿易港として整備途上の神戸。図の右下のあたりが外国人居留地、生田川の掛け替え前で、現在のフラワーロードを流れています。

鉄道と道路の整備

この地の都市化は鉄道開発が先行し、その後道路が整備されます。当時のこの地の主要な幹線道路は西国街道[1]であり、現在のＪＲの南側を走っていましたが、その幅員は３・６ｍ程度と狭く、馬の引く荷車の離合にも苦慮したことが記録に残されていることからもわかるように、近代都市計画の道路としては不十分でした。他の道路はいわゆる里道の様な小道であり、急速な交通の近代化を受けいれるインフラストラクチャとしては不十分でした。この道路の整備を進めたのが、耕地整理事業と呼ばれる事業です。その名前のとおり耕地整理事業は、本来農地を整備するための事業手法で、矩形の農地をつくり、その間に

[1] 江戸時代、京都から西宮まで西に向かう街道（狭義の西国街道）。西宮で山陽道と合して、下関まで至ります。神戸中心部では元町商店街などが西国街道沿いに発展しました。

十分な幅員の「農道」を整備することを事業の目的としています。しかし、逼迫する住宅ニーズを満たすために、阪神地域においてはこの耕地整理事業が宅地整備の手法として採用され、農地のかわりに住宅地が整備され、広幅員の道路が整備されたのです。

このような住宅地開発は**阪神間モダニズム**という新しい文化を地域に生み出しましたが、一方で都市環境という面では負の影響も与えました。まず、住宅ニーズを受けて道路整備、宅地の整備が進められることにより、多くの緑地や農地が失われたことです。当時の開発においては、阪神地域の各地で農地が開発され、代わりに住宅と道路が整備されました。その結果、緑地が失われただけでなく多くの水路が暗渠化し、さらに一定幅員の道路を有する整形の矩形の街割りが形成され、それがやや単調な都市景観をつくり出しました。阪神地域を実際に歩くとわかると思いますが、矩形の街割りの中に埋もれるように、非整形の路地が走っている地域がいくつか存在しています。これは多くの場合、古い時代に自然発生的に形成された農村の道路網の名残です。少し探してみると付近に神社とか、お地蔵さんなどの農村の名残を見つける事ができると思います。ところでこのような旧農村の区画割りは景観に変化をもたらすだけでなく、緑地や水路の保全にも一役買っている事がわかっています。このような場所では歴史的な水路や巨樹などの古い緑が多く見られます。しかしそれも割合としては少なく、先ほど述べたような開発により緑地や水路が失われてきた歴史があるのです。

人びとと海岸

次に、**海岸部**に着目してみましょう。明治以前は海岸付近に多くの漁港、村落が存在し、明治以降にこれらの村落を結ぶように鉄道や整備され、この地の都市開発が進みます。特に昭和 30 年代頃から神戸、阪神、大阪において臨海部の**埋め立て**が進められ、天然の良港、漁場の多くが失われました。後述のように大阪市部から須磨辺りのエリアにおいて、明治期までの水際線が残されているのは、須磨の海岸と西宮南部の一部に見られるのみであり、ほとんどの海岸線が埋めたてられ人工的な護岸で覆われてしまいました。

現在の国道 43 号線の多くがほぼ往時の海岸線と重なります。確かに地図をみると、43 号線より少し北にいくつか神社が見られますが、これはこの地で漁業を営んできた人々の信仰の対象として大切にされてきた証しであり、ここが海岸線であった証しといえるでしょう。同時に沿岸部の埋め立てで臨海工場地帯が形成され、多くの自然の護岸が失われ、多くの内陸部においては名実ともに「海が遠くなった」という様相が形成されるのです。

遠くなった海は人々と海の心理的なつながりを希薄化させ、また海にまつわる文化や行事の衰退を招きます。以前地域の古老の話として伝え聞いた話によると、かつては西宮の御前浜あたりから須磨あたりまで、白砂青松の風光明媚な景観が続き、散歩にはうってつけのコースであったようです。現在ではそのような景観は失われてしまいました。西宮にある郷土資料館では、バイ貝の貝殻を材料とした手作りの玩具や一本歯のゲタが収蔵され

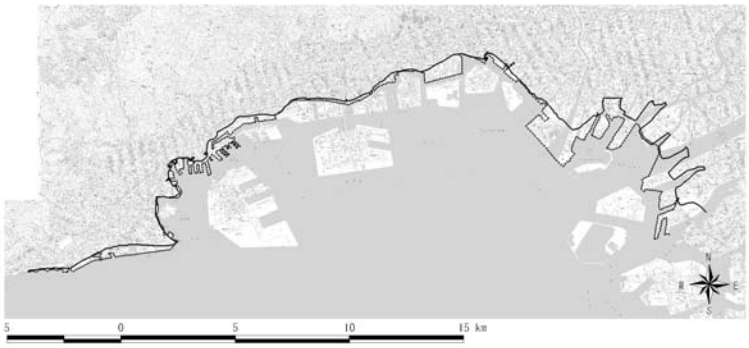


図２－６．神戸、阪神間地域における水際線の変化。実線が明治期の水際線で、破線は現在の水際線を示します（ただし人工島は考慮していません）。

ています。一本歯のゲタは砂浜でかけっこをする際に、砂に足を取られずにすむので、あつらえ向きだったようです。

これらはいかに砂浜が身近な存在であり、子どもの重要な遊び場であったのかを示すよい材料と言えるでしょう。このようにして都市化した臨海部により、海岸付近の独自の気候特性が失われ、いわゆる都市気候的様相がこの地においても観測されるようになります。

視点２―４．海岸の変化を通じて、人と水の関係を考えよう！

日本の景観のなかで、もっとも変わったものの一つが**海岸**であり、川の**堤防**です。どちらも人を水（海や川）から隔てようとします。もちろん、それには意味がありました。高潮・津波、あるいは度重なる水害を防ぐため、堤防というハードな防災技術を発達させたのです。さらに堤防は干拓や川を干上がらすことで、新たな国土を造り、耕作地を増やすことにもつながりました（例えば、先程も触れた神戸三宮の旧生田川の河川跡が、現在の加納町にあたります）。その得失のバランスを考えることもまた、まちづくりで大事なポイントかもしれません。

公共交通と都市化

その後、現在の**阪急電鉄**や**阪神電鉄**など鉄道会社による**鉄道整備**と、それとセットになった住宅地開発が進み、いわゆる富裕層の別荘地としてだけなく、中産層の人々のための住宅地としてのニーズも掘り起こされます。当時の、広告やパンフレットをみると、大阪の環境の悪化を指摘し、郊外で暮らすことの素晴らしさが謳われております。とくに阪神電鉄は「郊外生活のすすめ」という小冊子を定期的に発行し、阪神間の**ベッドタウン**としての魅力をアッピールしたようです。当時の富裕層や中産層の間に、郊外に暮らしそこで家庭を持ち、電車に乗って、大阪まで通勤するというライフスタイルが確立してゆきました。これが現在もみられるいわゆる**ベッドタウン**の形成につながります。とくに阪神地域においては、阪急、ＪＲ、阪神の３路線があり、また神戸や阪神地域の地理の特性上、平野部が南北に短いこともあり、エリアの多くの部分が駅の徒歩圏に収まりました。そのために、他の地域よりも開発が進み、この時期に著しいスピードで都市化がすすんできました。とくに阪急電鉄は当時村落の少ない北部の山麓付近に路線を設けたため、直線区間が多く、速度をあげることができたこと、またまだ周辺に住宅が少なかったので電車もすいていたことから、快適な通勤環境を売りにしていたようです。

視点２―５．電車（あるいは他の公共交通）で結ばれた街々

あなたが住んでいる“まち”はどんなまちですか？

“都市”には様々な性格があります。①統治に適した場所に発達する**権力（政治）都市**、②信仰に由来する**宗教都市**、③経済活動に特化した**経済都市**、④地方の中心都市として、中央からの富の移転をつかさどる**移転都市**、⑤工場等で生産（富）を生み出す**生産都市**、そして⑥20 世紀以降、大都市周辺に発達するベッドタウン／ニュータウン（**郊外都市**）。20 世紀初頭、これらの都市を電車で結びつけて新しいライフスタイルを創造するとともに、私鉄経営のモデルを確立したのが阪急電車育ての親、**小林一三**（1873～1957）です。そんな視点から、あなたの身近なまちを見直してみませんか？

阪神間モダニズム

このようなベッドタウンに、新しいライフスタイルを模索する敏感な人々もこぞって住み、そこで文化や芸術の華を咲かせました。いわゆる**阪神間モダニズム**です。谷崎潤一郎の『細雪』という作品があります。これはこの時代の阪神間を描いた作品で映画化もされ

ており、当時の富裕層の船場の商人文化と神戸のハイカラな西洋文化が融合する暮らしや時代の雰囲気が描かれています。

この阪神間モダニズムについては大阪側からアプローチするだけでは不十分です。貿易港を有する港町神戸の存在が大きな役割を果たしているのです。現在の三宮周辺は当時から西国街道も通っており、明治以前から人々の往来も盛んで、大きな市街地が形成されていました。しかし、港湾都市として明治維新以降、都市的な発展を遂げる神戸の人口の受け皿として、当時の神戸の中心部だけでは不十分であり、その近郊のエリアが次第に開発されてゆきますが、これは大阪のある東方向にも伸びてゆきます。建築学者である清家清氏がかつてその著書の中で、市街地は西方向に伸びてゆくことが多いのですが、神戸について東方向に伸びる傾向にあるのが特徴的であると述べています（清家、2000）。これはまさにこの方向に大阪があることがあげられるでしょう。現在三宮周辺には生田神社がありますが、当時はこの周辺は山林、農地でしたが、いまでは完全に市街地化しています。当時の市街地化のスピードをうかがい知ることができます。

図２－７．1870 年の神戸外国人居留地区画図。居留地の北側を区切るのが旧西国街道、北西隅は現在大丸百貨店です。

そして神戸元町付近には江戸末期に**外国人居留地**がもうけられました。この居留地にはイギリスやオランダなどの商館がたてられ、領事や商人が移り住みました。これにより、さまざまな西洋文化が日本に各地に広がってゆきました。ところで元町居留地付近のかつての地図をみると、街路の区画割りが現在とほとんど変わっていない事がわかります。実は、明治初期の都市計画がそのまま現在にも適用されているのですが、これはとても興味深い事です。当時の日本の西のメインストリートの一つである西国街道の幅員がだいたい３.６メートルであったとされていますが（図３－３を参照してください）、それから比べると現在でも自動車が通行でき、なおかつ十分な幅員の歩道をとれる幅の道路が整備されていたのですから驚くよりほかありません。設計者のイギリス人技師ハートが 100 年後の車社会の到来を予測していたのかというと、残念ながらそうではありません。当時注目されていたのは馬車です。馬車が滞り無く通行できるように、一定の幅員を持った街路と矩形の街割りが設計され、道路が舗装されましたが、これが現在にも通用したのです。

視点２－６．“都市デザイン”から、都市計画者の“思想”を読みとろう！

“まち”の区割りから、何が読めるか？　神戸外国人居留地の区割りから**植民都市**の本質を、銀座の区割りから明治期の**日本政府の志**を、大阪中之島と北浜にかけての古地図に**商人たちの心意気**を読みとることができるかもしれません。地方都市でも、明治から昭和にかけて各地に延びていった鉄道と町の関係を、都市の構造の発展とそこに潜む**為政者たちの意志の変遷**として読みとることもできます。

２－４．引用文献

関西学院大学総合政策学部編『都市、環境、エコロジー』関西学院大学出版会、2017。
清家清『家相の科学 21 世紀版』知恵の森文庫、2000。

2018 年３月
編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部

高校生のための都市まちづくり研究入門

Chapter３ａ　阪神地域の都市のなりたち２～都市化の進展前編～

Chapter３では、Chapter２に引き続き、客野尚志先生の「阪神地域の都市化と生活環境の変化～都市化がもたらしたもの～」などから、“ブラタモリ阪神地区版”（続き）として、旧神戸居留地から広がっていった外国文化の影響から話を始めます。

３－１．外国文化の影響

1868 年から 1899 年までの間、安政５カ国条約に基づいて、江戸幕府そしてそれを引き継いだ明治政府は、兵庫津の約 3.5km 東にあった神戸村に神戸外国人居留地をもうけます。東を旧生田川（明治に入って掛け替えられ、現在はフラワーロードになっています）、西を鯉川（後の鯉川筋）、南を海、北を西国街道に区切られた区域を、都市計画に基づいた整然とした街並みができあがります。これが、近畿圏における外国文化流入のまどぐちの一つとなります。

図３－１は建設されてから半世紀後の旧神戸居留地の区割りですが、現在もほとんど変わっていません。

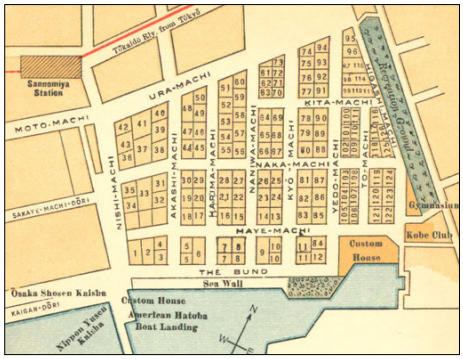


図３－１．旧神戸外国人居留地の区割り；Terry's Guide to the Japanese Empire (1920)。図の左上、現在の元町駅は当時は三宮駅と呼ばれていました。

神戸外国人居留地がもたらしたもの

神戸外国人居留地周辺に住んだ外国人商人が持ち込みそして根付かせた外国の文化や宗教、生活様式は、当時の日本人にとても新鮮にうつり、そのような文化の多くが市街地の展開に伴い、東の阪神地域へと広がってゆきます。船場の商人文化を背景に大阪から移り住む時代の変化に敏感な中産層が、元町付近から展開してきた新しい西洋の文化、生活様式に触れることにより、その文化が独自の進化をとげ、いわゆる**阪神間モダニズム**が形成され、現在までこの地の文化に大きな影響を与えるにいたるのです。

例えば、阪神間地域は歴史的に**洋菓子屋**や**パン屋**が多い地域ですが、これは洋菓子やパンを食べるという文化、ま

図３－２．かつてを偲ばせる旧居留地 15 番地

視点３―１．どんな外国文化が神戸から日本に広がったか、“リサーチ”しましょう。

食文化では、住文化では？、そして軽工業や重工業では？　例えば、1873 年、神戸にハンター商会（E.H. Hunter & Co.）を設立、大阪で大阪鉄工所を経営したエドワード・ハズレット・ハンター（Edward Hazlett Hunter、1843～1917）は日本人女性と結婚、のちに範多財閥・日立造船として発展させます。彼が建てた旧ハンター邸は文化財として、現在、王子公園で公開されています。

同時に、そこで働く方々はどこから集まってきたのでしょう。明治以前の神戸は家々もまばらな場所でした。現在、住んでいる皆さんはどこから来たのでしょう？　そのなかには、皆さんの曾祖父母、祖父母、ご両親も含まれるかもしれません。そこには“まち”の発展とともに、皆さん自身の“Family history”が浮かび上がります。

たその製法が神戸から伝わってきた事、またそれを食し、コーヒーや紅茶と合わせて楽しむという生活様式が敏感な層に受け入れられたためです。またこの地のファッションスタイルは独特の上品さがあるといわれておりますが、それも上記のような理由が背景にあります。

図３－３．当時の道幅を偲ばせる旧西国街道（現三宮オーパ２の北西角から東をのぞむ）。

植民都市としての外国人居留地の周辺

アジア・アフリカなどに建設された他の植民都市と同様、神戸居留地周辺にも多様な「街」が発達します。その一つは、現在の大丸百貨店から鯉川筋を挟んで、西に伸びる旧西国街道（図３－３）ぞいに発達した**元町**です。もともと西国街道沿いの海運・酒造業などの商業地でしたが、神戸港を介して海外文化の入口として発展します。

一方で、外国人居留地の周辺には、“雑居地”も広がります。これは、居留地の工事の遅れなどで地域を区切って暫定的に外国人の居住をみとめたものです。この結果、もうけられたものですが、このため、山麓部に異人館などが建てられる結果になりましたが、同時に、元町からさらに海岸よりの「雑居地」には清国人街が形成されます。これが現在の**南京町**です。これは、明治維新の際、当時の清国との間で条約などがかわされていなかったため、清国人（中国人）の方々は居留地内に居住できず、かわりに周辺の雑居地に住むことを余儀なくされたためです。

図３－４．現在の南京町

３－２．学問の場と山岳スポーツの発展

少し話が脱線するかもしれませんが、話題を少し展開させましょう。それは“**学校**”と“**山岳スポーツ**”です。それではまず、“学校”から。

阪神間モダニズムと学校教育

関西学院、神戸女学院、甲南大学などもこの文化の中で生まれ育まれてきたのですが、一方でその急激な都市化の中で翻弄されてきたといえるでしょう。アメリカ人の宣教師であるＷＲ・ランバス[1]は元町居留地に英語学校を設け、それが元となり現在の関西学院が誕生します。ランバスは当初居留地に近い場所（現在の栄光教会）に英語塾を開きました。その後、その場所が手狭となり、新しい場所を探し求めました。本来は居留地付近の利便性の高いところに開学したかったようですが、地価が高いため断念し、当時の郊外であった原田の森にキャンパスを開いたようです。当時の居留地付近は、外国の文化や宗教に大きな影響を受けて教会も多くありまし

図３－５．ランバス記念伝道女学校。関西学院創立者ＷＲ・ランバスの母ＭＩ・ランバスが 1888 年に設立、その後、合併等で聖和大学を経て現在は関西学院大学教育学部になっています。

[1] Walter Russel Lambuth（1854～1921）：アメリカの宣教師、医師、教育者。宣教師で教育者の父ジェームス・ウィリアム・ランバスとともに 1886 年（明治 19 年）に来日、南美以神戸教会（現在の神戸栄光教会）初代牧師に就任、英語学校（現パルモア学院）を開設、1889 年に神戸市郊外の原田村に関西学院を創立します。

た。これらからあまり離れずなおかつ静かで、阪神間の中産層の比較的裕福な家庭の子弟を教育する場として自然豊かな都市近郊林はうってつけであったのでしょう。

しかし、その後、キャンパスが手狭になったこと、また周辺の都市化がさらにすすみ、学問のための静謐な環境が損なわれ始めたことからさらなる郊外の地である現在の上ケ原にキャンパスを移します。その背景には、線路拡張計画によりさらなる土地が必要となった阪急側からの土地交換の提案があります。当時のニュータウン地区であった上ヶ原に白羽の矢が立ったわけです。上ヶ原は台地の上部にあり、市街地からも距離があり、周辺には農村と水田が広がる地域であったので、静かな教育環境という点では理想的であったのです。その後、市街地化が進みますが、関学のキャンパス内には豊かな緑地が現在まで保全されています。

図３－６．旧原田の森キャンパスに唯一残る当時の建物、旧ブランチ・メモリアル・チャペル（現神戸文学館）。

さて、関西学院の礎となった王子公園付近ですが、当時は原田の森と呼ばれていたことからもわかるように「**森**」でした。この「森」には関西学院だけでなく、現在でも多くの学校が見られ､また歴史的にみてもそのルーツがこの地にあるという学校が多くなります。たとえば、神戸高等商業学校（現神戸大学)、県立神戸商業学校（現星陵高校)、県立神戸高等商業学校（現兵庫県立大学)、松蔭女子専門学校（現松蔭女子学院)、六甲中学校などがこの地にルーツをもちます。

関学はじめ阪神間の学校はおしゃれでハイカラというイメージが筆者を含めて、一定以上の年齢の方には強くありますが、その背景には居留地発の外国文化の影響を強く受け、阪神間モダニズムに育てられてきたという歴史的経緯があるのです。現在の上ケ原キャンパスにも多くの緑が保全されていますが、当時、原田の森で緑や木立に抱かれながら研究や学問をすすめてきた遺伝子が今に残されているのでしょう。上ケ原キャンパス周辺の地域については、後編でまた触れたいと思います。

視点３―２．教育機関とまちづくり、そして交通機関

日本の**近代化**において、**高等教育機関**が大都市に作られていきます。例えば、1877 年の東京大学は旧加賀前田藩邸跡地に誕生しますが、さらにそれより前、1858 年旧中津藩邸で誕生した福澤諭吉の慶応義塾が 1871 年に旧島原藩邸等に移転します。

それが大正前後になると、日本全体で進行した都市化や、あるいは関東大震災等による被災によってキャンパスが**郊外**に移転し始めます。とくに有名なケースが、1922 年の関西大学の千里山キャンパスへの移転、そして 1929 年の関西学院の上ケ原キャンパスへの移転です。前者は北大阪電気鉄道（のちに阪急に吸収)、後者は阪急電車のイニシアティブによるものでした。

こうして各地にひろがった大学の周辺にはどくとくの文化を持った**大学町**が誕生します。高校生の皆さんにとっては自らの進学先、そして大学生の皆さんには通っているキャンパスがどのような経緯で誕生し、それがまちづくりにどのように関係していたのか、オープンキャンパスの際などに、大学のキャンパスだけでなく、その周辺のまちの様子もリサーチしてみるのも、興味深いかもしれません。

神戸を中心とした山岳スポーツ

さて、時計の針を戻しましょう。居留地に暮らしていた外国人たちは封建社会下では移動範囲が制約されていました。限られたエリアの中で、リゾートの場として六甲山に着目しました。外国人達は登山を楽しみ、山頂付近に山荘を建てて、ゴルフコースを整備し、そこでゴルフやスキーを楽しみ始めたのが六甲山における**山岳リゾート**の嚆矢であり、またこれが日本の山岳リゾートの起源といわれています。

特に有名なのが、貿易商のＡ・Ｈ・グルーム[2]です。かれは六甲山頂付近に山荘を設けて日本初の４コースからなるゴルフコースを開設しました。古来より日本では、山、特に奥の山頂付近の部分は遊興の場所ではなく、信仰や生活の糧を得る場所でした。山の中でも人里に近い里山､その奥にある奥山というように空間が分けられ､里山では薪や炭の材料、さまざまな狩猟、採取が行われていましたが、奥山は神の住む場所として信仰の対象となり、軽々に立ち入るべき場所ではありませんでした。そのために山で遊ぶ、山で憩うという文化が日本にはそれまでありませんでした。

一方で有名な話ですが、六甲山は明治初期にはいわゆる**禿山**であったことが知られています。特に江戸時代後期に薪炭を目的に伐採が進められ、かなり森林の少ないいわゆる荒れ山に近い様相を呈していたことが写真資料などから判明しています。そのために、山道を整備し、ゴルフ場などの山岳リゾートを開発するにあたり、現在のような重機のない時代においてもさほど苦労することなく進められたのかもしれません。また六甲山の頂上部はなだらかであったことから、地形的な面においてもゴルフ場やスキー場を整備する上で有利だったのでしょう。

また、冬には頂上付近のため池に氷がはり、スキーだけでなくスケートが楽しめたようで、これは昭和の中期ごろまでよく見られた光景とのことです。

現在では、温暖化により、積雪や氷結も減少し、**ウインタースポーツ**のメッカとしての姿も失われました。

電鉄会社などによるリゾート・ハイキング開発

一方、こうした山岳リゾートに関連してか、電鉄会社は 1930 年頃から本格化するハイキングブーム等に対応して、沿線各地でハイキングコースや各種のレクリエーション施設を整えていきます。例えば、阪急は 1934 年に「阪急ワンダーフォーゲルの会」を発足させるなど、沿線のリゾート資源を開発します（当時、大軌と呼ばれた近鉄では、奈良などでハイキングにあわせて史跡めぐりのコースを開発します；山口、2013)。鉄道会社はこのようにして、阪急の実質的創業者小林一三氏の「乗客は電車が創造する」という言葉を実践していったのです。

とくに六甲山をめぐっては、阪急電鉄と阪神電鉄が開発にしのぎを削ったことが知られています。その結果、交通手段としてロープウェイやケーブルカー、そして山上に多くのホテルや保養施設が建設され、一般市民にも親しまれる存在となっていきます。

（後編に続く）

[2] アーサー・ヘスケス・グルーム（Arthur Hesketh Groom；1846～1918)、幕末に来日、神戸でから明治にかけて日本茶の輸出、紅茶の輸入などを手がけるほか、オリエンタルホテルの経営なども手がけました。

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter３ｂ　日本の近代化と大学の発展～都市化の進展後編～

３－３．日本の都市化と郊外の誕生：関西学院と日本の近代化

原田の森キャンパス

“大学町”の誕生について、関西学院をケース・スタディにとりあげ、もう少し紹介してみましょう。19 世紀末に来日した後のＷＲ・ランバスは布教手段の一つとして教育機関設立に邁進します。しかし、居留地ができて 20 年近く、周辺は都市化が進み、校地の目処がたちません。第２代院長の吉岡美国は回想しますが、この短い文章には明治維新後の神戸の急速な都市化と、その周辺の“郊外”の関係がにじみ出ています。

同志のものと共に始終神戸市の内外に土地を物色してゐたが、明治 21 年 10 月の初め菟原郡都賀野村の内原田村（現神戸市西灘区原田）に２、３万坪の纏まった売りものがあることを、神戸多聞教会の会員で当時パルモア夜学校に通学せる歯科医の雨夜孝太郎氏が通告して呉れられた。（略）交通上からみてこの箇所は余程神戸市の東に偏してゐる嫌ひがあって検分者の多数が不賛成であったが Lambuth 先生と他一人は神戸市は追々東へ車へと発展して、遂には御影、西宮尼ケ崎と続き、やがては大阪と至極密接な関係をもつに至るであらうと予想の下に、その敷地購入の交渉を始むることとなった。然しながら達い将来の予想は兎も角として、当時は殆んど人跡さへ絶へて頗る寂寥な所であった。

図３－７．関西学院旧原田の森キャンパス（現王子公園）。中央やや下にブランチ・メモリアル・チャペルが、右下に当時の阪急神戸本線（のち上筒井線になるも廃線）が見えます。

こうして神戸という「**都市**」のはずれの「**郊外**」だった原田の森は、ランバスの先見の明で関西学院発祥の地となります。40 年後に関西学院は上ケ原に移りますが、そこも神戸、西宮等の都市圏 vs. 電車で通う郊外という対比が続きます。こうして関西学院は日本の高等教育機関としては珍しく、はじめから郊外型キャンパスで出発します。授業開始は 1989 年１０月 11 日、ランバスと５人の教授、19 人の学生・生徒でした。

視点３－３．“都心”と“郊外”

Chapter４では、角野先生が都会の成長について、まず都心部への人口集中と土地利用の高密度化（**都市化**）から、やがて地価が安い郊外の開発（**郊外化**）を経て、成熟期に入ると都心でも郊外でも人口が減少し、衰退が始まる（**逆都市化**）と記述しています。関西学院は都市と郊外のバランスの中に成長してきたわけですが、皆さんが住んでいる場所はどうでしょう？　まちの歴史をひもときながら、都心と郊外、あるいはさらに田園地帯なのか、考えてみましょう。そこから、新たなリサーチへのアプローチが始まるかもしれません。

都市化の進展：教育環境の悪化

このように歩み始めた関西学院ですが、創立 30 周年が過ぎたあたりから、二つの問題に直面します。まず、キャンパスの狭隘化と環境悪化です。とくに新興都市神戸の郊外へ

の拡大は「教育環境の悪化」に直結しました。

ＷＲ・ランバスが校地として原田の森を選定したのは、この地が喧騒の市街から離れており、教育に適している点にあった。創立当時から大正時代に至るまで、閑静な学院の教育環境は、交通の不便を補って余りあるものであった。ところが大正時代に入ると、神戸市の市街地は年々東方へと目覚ましい膨張を遂げていった。これは、神戸市電気鉄道上筒井線の敷設や阪神急行電鉄神戸線の開通により一層促進されるところとなり、やがて学院の四方は住宅や店舗が立ち並ぶ繁華街となっていった。（略）このようにして、往年の恵まれた原田の森の環境がほとんど失われ、既に限界にきていた。（『関西学院百年史』）

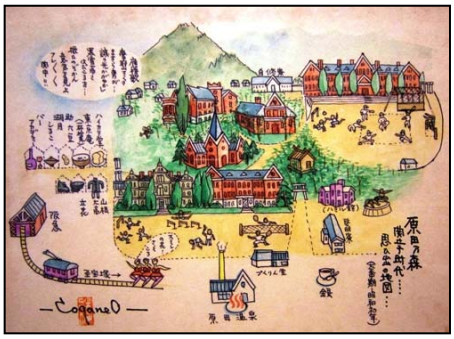


図３－８．当時の卒業生の方がキャンパスライフを回顧しスケッチ。左下に描かれているのが、図３－６にもある当時の阪急神戸本線（旧上筒井廃線）です。

こうした問題を抜本的に解決する手段として、校地移転計画がもちあがります。そして、移転地候補の一つが当時の武庫郡甲東村、「**上ケ原新田**」です。1925 年夏のことでした。

３－４．上ケ原キャンパスへの移転

武庫川周辺：江戸時代からの新田開発と郊外電車による宅地開発

それでは、移転先候補の上ケ原新田やその周辺の仁川、武庫川などを紹介しましょう。この地域こそ、日本の近代化における都市と郊外の開発をめぐる典型例かもしれません。

まず、**新田**というキーワードに着目して下さい。江戸初期、武庫川水系から一段と高い段丘上に広がる上ケ原は用水不足に苦しんでいました。1646 年に大坂佃村の孫右衛門と九左衛門が開発権を取得、仁川からの**用水工事**を始めます（環境学習都市・にしのみやエココミュニティ情報掲示板「甲東」）。彼らの努力で上ヶ原新田が開かれたのが 1653 年、その用水や分水樋は今も関西学院の山側に残っています。江戸初期の人口増加を支えた新田開発にまつわる、産業遺産とも言える存在です。その後も工事は重ねられ、隧道 126mを含む 800mの用水路の完成は 1802 年です。

図３－９．関西学院の山側に現存する分水樋：ここで仁川用水からの水を、下流の３つの水路に分けます。

台地の下に広がる武庫川水系も大きく変貌、「摂津の人取り川」として氾濫を繰り返す暴れ川は**治水工事**を重ねます。1911 年（明治 44 年）頃の地図には、武庫川沿いに「樋口新田」「荒木新田」などの地名が散見できます。これは江戸から明治にかけて川を堤防で狭め、**新田化**を進めた歴史が反映されているのかもしれません（図２－３を参照）。

兵庫県ＨＰ「武庫川水系河川整備計画」によれば、現在の武庫川の景観につながる近代的改修が進むのは大正に入ってからです。第１期改修は 1920～23 年に東海道線以南の約５km でした。費用には河口デルタの支流だった枝川、申川の廃川敷の売却益が充てられました。この廃川跡に 1924 年、**甲子園球場**が誕生します。第２期工事として、1924～28 年に東海道線から逆瀬川までの約８ｋｍが改修されました。関西学院の上ケ原移転と武庫川下流の整備工事の完成がほぼ同時期にあたります。　それでは、河川整備の現場では誰が働いていたのでしょう？　実は、多数の朝鮮半島や沖縄出身の人々が従事していたのです（林、2006）。帝国主義時代の日本は、新たに獲得した植民地からの**労働移動**で自らの国土を変えていった、これが近代化・都市化の一側面であり、**国際的労働移動**が大

正年間に現実のものとなっていました。

視点３－４．“国土の開発”と“人口”、そして“災害”

江戸初期の 1600 年、日本の人口は 1､227 万人でした。耕地面積は 220 万町歩、一人当たり 0.178ha、実収石高１.61 石（241.5kg）で、充分に人口を支えることができました。この後、全国で**新田開発**が展開した結果、江戸中期の 1700 年、耕地は 296 万町歩に増えますが、人口は 3､128 万人、一人当たりの耕地は 0.095ha に減ります。このため、江戸期後半の人口は 3,000 万人台で停滞します（このような公刊データの利用法は『高等学校課題研究ハンドブック』の「６ａ―２．公刊データをうまく使いこなそう」などを参考にしてください）。

同時に、新田開発は**環境問題**を引き起こします。例えば、①氾濫原を開発したため、**洪水**や湛水が頻発、②台地や山地の開発で、共有地である入会地が失われたり、**用水が不足**、③建材や燃料の需要で山林を伐採、川水が減ったり、逆に洪水がおきる。都市周辺に**はげ山**も増えました。④鉱業の発達で、**土砂流失**による川床上昇や洪水、田畑荒廃、水質悪化等が進みます。そして、⑤都市でも**用水不足、流行病、ゴミ処理**等の問題が生じます。

現在の阪神間に広がる都市空間には、こうした過去が潜んでいます。“まち”をリサーチすることは、その過去も理解することにつながります。そんな時、何より役にたつのが、昔の地図であることは、Chapter２なども参照して下さい。

関西学院の上ケ原移転と小林一三：大学を育てながら誘致する

関西学院の歴史に話を戻すと、上ケ原移転には用地買収、建設、大学設置の供託金などで資金が必要でした。これを仲立ちしたのが阪神急行電鉄（**阪急**）の小林一三でした。

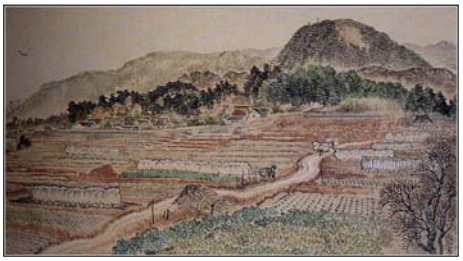


図３―10. 関西学院移転前の上ケ原新田の様子。

これは小林が主導する**鉄道沿線開発**の一環に位置づけられます（老川、2016）。1907 年に箕面有馬電気軌道（現阪急宝塚線）取締役に就任した彼は「**乗客は電車が創造する**」をモットーに池田・豊中などでの**住宅地開発**、**宝塚温泉・歌劇場**、梅田での**百貨店経営**などを展開します。もともとは人影もまばらだった場所に線路を敷き、ショッピング街や娯楽施設まで開発する**近代的デベロッパー**の出現です。この中に**大学**も加わります。すでに 1919 年に大阪医科大学予科を阪急沿線に招致し、大学の郊外移転の先鞭をとっていた小林の学校誘致の特徴を、木方（2010）は「大学を育てながら誘致する」と指摘します。折しも阪急は 1920 年に神戸線を（当時の終点は原田の森キャンパス傍の上筒井駅）、1921 年に西宝線（現今津線）を開設していました。

こうしたビジネスプランはさらに大学周辺の街の性格までも形づくります。2008 年５月 24 日の朝日新聞の記事は以下のように指摘します。

（西宮）市は 1958 年、ここを西日本初の文教地区に指定。教育にふさわしくない業種の出店を条例の規制で阻んだ。まちの性格を決定づけたきっかけは、神戸市灘区の「原田の森」にあった関西学院の上ケ原移転にさかのぼる。（略）小林は、移転先として上ケ原の社有地を譲るうえ、校舎建設費を負担することも約束したという。そこまでした理由について、関学大名誉教授の津金沢聡広さんは「学園都市を造り、今津線で通学客を運ぶのが狙いだった」とみる。（朝日新聞「アイデア王の学園都市阪急今津線」）

小林が推進した交通網整備、宅地開発、商業施設・娯楽産業（その中には宝塚歌劇や旧宝塚ファミリーランド、さらには東京宝塚劇場が発展した東宝も含まれるでしょう）、さら

に誘致された高等教育機関などは、旧神戸居留地を発信元とする外国文化の影響とあいまって、阪神間モダニズムを形成していきます。

見慣れたランドスケープ（景観）にさまざまなことがらを読みとろう！

この Chapter の結論は、身近な「見慣れた風景」のなかに潜むさまざまな事柄をひろい上げるのが、都市まちづくり研究の醍醐味の一つである、ということです。私たちがなんの疑いもなく毎日みている景観には、地形・地質上の特徴があり、生態的な遷移が進行し、先史時代からの人間の活動による影響を受けています。さらに都市ができることで後背地である農村も変わり、さらに近代化で人口構造や人の動きも変貌し、それが我々自身を変えていきます。

そうした目で、今も整然として残る神戸旧外国人居留地の街路も、関西学院の背後を今も流れている仁川用水も、かつて洪水のたびに暴れた武庫川、仁川をおさえこんだ堤防も、昔は人影も薄い「武庫の平野」に人を集めた小林一三の阪急電車もそれぞれ歴史を秘めており、その延長線上に都市がなりたっていることを理解した上で、これからのまちづくりを考えていくことが高校生や大学生の皆さんにとっての課題になるかもしれません。

視点３－５．人の移動

人の**移動**は２つのタイプに大別されます。その一つは歴史的な「**大移動**」＝新天地への進出で、典型例は１万数千年前にベーリング海峡を渡り、北米・南米に広がったネィティブ・アメリカンの祖先でしょう。

大移動以外の移動もいくつかのタイプに分けられます。例えば、**旅行**や**巡礼**など、出発点に戻るのが全体のタイプと、出発点に必ずしも戻らないタイプです。後者の典型は、江戸期から日本の近代化にかけて、“田舎”から“都会”に出た若者たちです。とくに江戸期では多くが男性であったため、都会の男女比は著しく偏りました。さらに都会では感染症や火事等の災害死も多く、上京した者の多くは子供を残さず都会で死んでしまいます。しかし、そこで失われた人口は新たな上京者で埋め合わされる。こうして若者たちが次々にアリ地獄に吸い込まれていくように死んでいく構造を論じたのが「**都市＝アリ地獄**」説です（速水、２００１）。

20 世紀に入って、**国内移動**も**国際的移動**もともに大規模化します。日本では高度成長期に農村から都市へ、集団就職などで若年労働者が大量移動しました。結果的に、農村は過疎で、都市は過密で苦しみます。現在の阪神地区は、そうやって田舎から出てきた人たち、あるいはその子弟が創り上げた世界であり、各家族にはそれぞれの“**Family History**”があるはずです。皆さんが都市やまちづくりをリサーチする際、住民の人たちはどこから来たのか？　どこに行くのか？　考えてみましょう（『高等学校課題研究ハンドブック』「Box６ｄ－１．Family history を探ろう：自らの家族の来し方を調べる」（p.39）も参照）。

３－４．引用文献

速水融『歴史人口学で見た日本』文藝春秋社、２００１。
関西学院大学総合政策学部編『都市、環境、エコロジー』関西学院大学出版会、2017。
関西学院百年史編纂事業委員会編『関西学院百年史：1899～1989』関西学院、1994。
木方十根『「大学町」出現』河出書房新社、2010。
老川慶喜『帝国の鉄道』中央公論新社、2016。
山口敬太「近代における奈良・山辺の道の形成とその背景」『ランドスケープ研究』6:25-32、2013。

2018 年３月
編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter４ａ．都市再生と都市デザインを考える前編

Chapter４では、高校生・大学の皆さんの都市再生に関するフィールドリサーチへのご参考に、『都市、環境、エコロジー』（関西学院大学総合政策学部、2017）から角野幸博先生が都市再生と都市デザインについて紹介します。なお、フィールド・リサーチについての一般的な説明については、『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter６ｃ　リサーチ上級編３：フィールドワークについて」や「Chapter６ｄ　リサーチ上級編４：フィールドワーク（続）：インタビュー＆聞き書き」などをご参照ください。

４－１．成熟した都市の課題

生態系の“**遷移**[1]”のように、都市も成長・成熟ののち、衰退します。その典型が中心市街地の衰退です。それでは“都市を再生”するためには、どうすればよいのでしょうか。まず、都市の成長からまとめてみましょう。

都市発展段階説

都市の成長は、まず都心部への人口集中と土地利用の高密度化から始まります（**都市化**）。都心部の密度が高まり開発適地が少なくなると、より地価が安い郊外の開発へと向かいます（**郊外化**）。特に住宅は地価負担力がオフィスよりも弱いために、都心から郊外への移転が先に進み、いわゆる**ドーナツ化現象**が進みます。やがて成熟期に入りますと都心でも郊外でも人口が減少し、衰退が始まります（**逆都市化**）。これが、クラッセン（1982）が示した**都市発展段階説**です。

クラッセンは**夜間人口の増減**で都市化、郊外化、逆都市化のプロセスを説明しています。もちろん、これだけで都市化のプロセスをすべて説明することは難しいのですが、多くの成熟都市はどこも同じ変化を経験してきました。衰退した都心で何らかのアクションを行い、再び経済活動を活性化させることができれば、「**再都市化**」が可能になるといいます。

視点４－１．リサーチの対象である“まち”は、どんな成長段階にありますか？

皆さんがリサーチする“まち”はどんな成長段階にあるでしょう。例えば、できたばかりのニュータウンでは、急増する“住民”やとくに“子どもたち”への対応が急務です。上下水道や交通等のインフラ、あるいは保育園・幼稚園、小中学校の整備が重要です。一方、まちができて 20 年、30 年が経てば、子どもたちは成長してニュータウンを巣立ち、あとは高齢社会に変わるかもしれません。学校はがらがらで、高齢者向け施設やサービスが必要になるかもしれません。当然、行政も商業形態も、そして公共交通さえ変わります。まず、こうした都市の成長をめぐる“**時間軸**”を意識しましょう。

なお、データの比較には何を“軸”に定めるのか？　時間軸か？　**空間軸**か？　それともまた別の基準によるのか？　しっかり考えることが必要です。そのあたりは『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter６ａ－３．データをどのように比較するか？」（p.26～27）をご参照ください。

[1] 生態系や群集で、植物相が変化することによって環境が変化して行く現象。よく知られる例では、裸地→一年生草本群集→多年生草本群集→灌木の侵入→低木林→陽樹林→陰樹林と変化します。

実際には、都心での業務床ニーズが鈍化すると、替わって相対的に地価負担力の低い住宅が立地し始めます（大阪や神戸の都心にタワーマンションが増えているのはそのためです）。その点、クラッセンの説明はシンプルでわかりやすいと思います。

図４－１．あまがさき緑遊新都心地区：JR 尼崎駅北側のキリンビール工場跡地等の再開発計画（2007 年）

再開発事業とは？

現実の大都市では、産業構造の転換や交通機能の高度化、港湾機能の衰退などによって発生した工場跡地や貨物ヤードなどの大規模遊休地や、オフィスの移転統合などによって生じる**空地**で、**再開発事業**が進められます（図４－１）。

図４－２．同じ尼崎駅周辺の商店街：典型的な“シャッター通り”（2007 年）

とくに東京など国内の大都市は、経済活動や研究開発拠点の座を海外の都市との間で争っています。有能な企業や人材を世界中から集めるためには、美しさや住みやすさという点からも高い評価を受ける必要があり、毎年世界中の様々な団体が、複数の指標を比較して世界の中での大都市ランキングを発表しています[2]。日本からは東京が常にベストファイブに入りますが、それ以外の都市は圏外です。企業活動や政治活動が東京一極集中するために、首都圏ほどにはいくつもの大規模な都心再生プロジェクトは実現しづらい状況です。こうして、中心市街地の再生は全国の都市共通の課題となっています。

また高度経済成長期に開発された多くの郊外住宅地では、日本全体以上に高齢化が急速に進んでいます。少子化や人口減少が加速するとともに、空き地や空き家が増え続けており、特に中心市街地の商店街や（図４－２）、交通条件が不利な郊外住宅地では衰退が懸念されます。政府はコンパクトタウンの実現をめざして「**立地適正化計画**[3]」の策定を全国に自治体に指示していますが、都市デザインの主要課題のひとつでもある「歩いて暮らせるまちづくり」は、郊外住宅地では実現が難しいのが現実です。

このように都心でも郊外でも都市再生へのニーズと関心が高まっていますが、どの都市にも共通した処方箋はありません。各地域が経験し、蓄積してきた特徴と、固有の資源を生かした再生の方途を探る必要があるのです。

視点４－２．再開発地域 vs. 衰退地区

再開発地域か、それとも**衰退した地区**か、あなたはどちらをリサーチしたいと思いますか？
再開発地区ならば、地域の変化の実態、新しくできたまちのメリット、そしてデメリット、一変した人の流れ、等々。　一方、衰退している地区ならば、どうやってこの地区を活性化させるか、どうやったら、シャッター通りをまた昔のように、人びとが行き来する世界に戻せるのか、さまざまな課題がありますが、それぞれに切り口を考えて下さい

[2] 森記念財団によるランキングでは、2015 年はロンドン、ニューヨーク、パリ、そして東京の順にランクされました。

[3] 居住機能や医療・福祉・商業、公共交通等の都市機能を改善し、コンパクトなまちづくりと地域公共交通の再編を進めるもので、市町村マスタープランの高度化版と位置づけられ、2016 年 7 月 31 日時点で 289 の自治体が具体的に取り組んでいます。

４－２．都市再生プロジェクトの推進

都市再生特別措置法

図４－３．ＪＲ北ヤード側から眺めた梅田のグランフロント大阪（大阪駅北地区再開発計画）

2002 年に、**都市再生特別措置法**が施行されました。この法律はその後何度も改正を重ねているのですが、底流にあるのは**規制緩和**と**民間活力**の導入です。この法律に基づいて都市再生緊急整備地域に指定されると、その地域内で一定の条件をみたせば都市再生特別地区（**都市再生特区**）の指定を受けることができます。都市再生特区に指定されると、そこでは容積率規制など従前の都市計画規制が取り払われ、民間事業者が独自の計画提案を行うことができます。

ただし提案の中には都市再生に寄与する**商業業務機**能の提案や**公共空間**整備が求められます。その内容は広場および歩行者ネットワークの整備や、コンベンション機能や音楽ホールの設置、知的創造拠点の整備など多岐にわたります[4]。

さらに東京、名古屋、大阪、福岡では、都市再生緊急整備地域の内から「特定都市再生緊急整備地域」が指定されています。これは、都市の国際競争力の強化を図る上で特に有効な地域として政令で指定される地域で、2016 年現在、11 地域が指定されています。

都市デザインにおける「公共」

図４－４．浜離宮付近の汐留再開発地区（旧汐留貨物駅）

都市再生特区では「**公共**」という概念が多岐にわたって理解されていますが、公共空間の整備については都市デザイン的視点が不可欠です。公共貢献効果の大きさと規制緩和の程度（主に容積率緩和）とが天秤にかけられながら、審議会など所定の手続きを経て計画が決定されます。しかしながら公共貢献の程度を計る客観的な指標は存在しないため、行政との調整に委ねられるところが大きいのです。事例を見る限り、総合設計制度による公開空地の設置のように単に公共空間を提供するというのではなく、その場所の日常的な運営管理に積極的に関わることが求められていることがわかります。

各地で進められる**大規模遊休地跡**の再生や旧港湾地域の再生などは、都市再生特別措置法に基づかないものも多く、広義の都市再生プロジェクトということができます。敷地規模が大きい場合は新たに街路や公園などの基盤を整備する必要がありますし、古いレンガ倉庫などが残っている場合は、保存活用の方途を新規の建物建設と同時に検討するなど、都市デザイン的アプローチが求められます。その際に、固有の歴史的コンテクストを新たなまちづくりにどのように生かすかを考えることは、都市デザイン必須のプロセスです。

たとえば旧港湾地域の**再生事例**としては、ボルチモア、サンフランシスコ、ロンドンドックランド、リバプール、シドニーなどが有名ですが、国内でも神戸や函館、横浜他多数

[4] 大阪市では、梅田阪急ビルの建て替えで地下歩行者ネットワーク整備と文化集客機能拡充が、グランフロントでは知的創造拠点（ナレッジ･キャピタル）を中心に業務、商業、宿泊、居住機能などの導入が評価の対象となりました。

の事例があります。鉄道の貨物ヤード跡地の再開発では、トロント、神戸ハーバーランド、グランフロント大阪（図４－３）、東京の汐留（図４－４）、などが有名です。

このような大規模敷地の再生の場合、プロジェクトの波及効果や市場環境を分析したうえで、適切な用途構成とそれぞれの規模算定そして事業収支計画を立てます。いわゆる**開発企画**とか**建築企画**という分野です。こうして事業の枠組みが決められたうえで、全体の建築設計が行われます。個別の建築設計だけでなく、これらをつなぐ快適で魅力的な公共空間を配置し、まち全体のデザインをまとめることが求められます。

デザインの際には、その場所がもつ**固有の魅力**、たとえば水辺空間の魅力や既存のストックの活用、紡がれてきた物語などを空間化、可視化することが求められます。さらに重要なのは、そこでの人々の立ち居ふるまいを想像することです。計画者が来街者の行動を意図的に誘導することもあれば、来街者の自由で思いがけない行動を誘発するしかけを仕込んでおくこともあります。しかもその場所の魅力が維持されるためのルールや費用、管理体制を決めることも必要です。都市再生プロジェクトの推進には、都市デザインのあらゆる技法とノウハウを駆使することが求められるのです。

４－３．都市間で競争する

都市は競争する

ごく近年まで、都市デザインや都市計画では、都市の無秩序な成長拡大をどのようにしてコントロールするかということが主要な命題でした。関連する法律や制度の大半はこのことを前提として作られています。ニューアーバニズム[5]やサステイナブル・コミュニティの提案も、この延長線上にありました。

ところが、日本の都市をはじめ成熟都市の多くではこの前提が崩れつつあるのです。都市は永遠に成長拡大するものではなく、都市圏のところどころで衰退や縮退が起こります（図４－５）。**スマート・シュリンキング**[6]が求められる一方で、世界レベルでの**都市間競争**が起きており、これに対応しなければ一層衰退が進むのではないかという恐怖心に苛まれています。

日本の高度経済成長初期には、「国土の均衡ある発展」が国土政策として標榜されましたが、今は限られた人材や資源を大都市に集中させて、国際的な都市間競争に対処しようという気配を感じます。また、ひとつの都市だけでは経済力や情報発信力に限界があるのではないかとの見方から、巨大都市圏すなわち**メガ・リージョン**[7]としての魅力発信が必要との意見もあります。

図４－５．廃墟化しつつある店舗や、取り壊しによる整地作業

（後編に続く）

[5] 1980 年代から広がった、それまでの自動車中心の郊外住宅開発を批判し、伝統回帰的な都市計画として鉄道・バスなどの公共交通を中心に、商業施設や住宅地が取り囲むような都市モデル。

[6] 人口減少や高齢化の進行などの危機に対応できる持続可能な社会を作るために取るべき戦略として、「かしこい凝集」を心がけようとする政策。

[7] メガリージョン：ＩＴ産業が集積するシリコンバレーや、金融等が集まるニューヨーク都市圏のように、一つ一つの自治体を越えた広大な地域圏を示す言葉です。

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter４ｂ　都市再生と都市デザインを考える

４－３．都市間で競争する（前編からの続き）

競争の担い手：クリエイティブ・クラス

近年は、どの成熟都市でも、研究開発や情報産業、デザインなど高付加価値の産業振興に関心を高めて、その担い手となる人材や企業を集めることに腐心しています。こういった階層の人々をＲ・フロリダ（2005）は「**クリエイティブ・クラス**」と呼び、彼らが活躍できる都市の条件として、**技術**（Technology）、**才能**（Talent）、**寛容性**（Tolerance）という**３つのＴ**を提示しました。この主張は瞬時に世界中の成熟都市に広まり、世界レベルの人材獲得競争につながりました。さらにビジネスや研究開発をしやすいかどうかに加えて、生活空間としての都市の快適性や安全性も評価指標となっています。

フロリダ（2009）は、開放的で外部の才能の獲得に有効な能力を備えている都市を「グローバルな才能の磁石」と呼んでいます。前述した世界の都市ランキングについてもこうした視点が指標化されています。彼の後の著作では、クリエイティブ・クラスが主導する先端的な経済発展は、世界の中の一部のメガ・リージョンに集中すると述べ、さらに、彼らの居住地の選択行動について解説しています。

彼の主張は､実際の都市政策レベルでどのような動きをひきおこしているのでしょうか。メガ・リージョンの代表例として、米国では西海岸のシリコンバレー一帯や、バージニア州、ワシントンＤＣ、メリーランド州にまたがる「グレーター・ワシントン」があります。カナダではトロント市を中心とした「グレーター・トロント」、ヨーロッパではフランクフルト・ラインマイン地域などを挙げることができます。いずれの地域でも、人材・企業を呼び込む激しい競争が起きています。東アジアでは中国の環渤海地域、長江デルタ、珠江デルタ、香港やシンガポールなどが注目されつつあります。そしてこれらはいずれも、先進的な都市デザインを試みている地域でもあるのです。

視点４―３．“人”を育てるには

“まち”の再開発といえば、ともすれば、都市デザイン・建築やインフラ整備などを考えがちですが、ソフト面も重要です。さらに、開発の担い手をどう育てるのか、高校生や大学生の皆さんは、リサーチを進めながらも、どんな人材育成の方法があるのか、交流のスペースをどのように設置すればよいのか、そのあたりにも思いをめぐらすことで、一味違ったまちづくりの発想が浮かぶかもしれません。

４－４．エリア・リノベーション

まちを見直す！

ビッグ・プロジェクトとは別のタイプの都市再生プロジェクトもあります。近代建築や町屋・長屋を修復し、あるいは空地の有効活用を進めるなど、ピンポイントの再生から**エリアの再生**につないでいこうとする動きです。地方都市での事例が多いのですが、大都市であってもこのような視点からの活性化をめざす地区は少なくありません。大手のデベロ

ッパーや有名な大企業ではなく、地元の商業者や住民、ＮＰＯなどが関わるなど等身大の**再生プロジェクト**です。

たとえば京都では伝統的な**京町屋**が次々と消えていく中で、これを修復して商業施設などに再生する試みが以前から行われてきました。他都市でも、伝統的建造物群保存地区に指定されるほどの文化財的価値はなくとも、様々な建物を再生させ有効活用するプロジェクトが進められるようになりました。伝統的な町屋に限らず、古いオフィスビルや一般の店舗のリノベーションをきっかけにして、街の再生を試みる動きが、特に若い実業家やプランナーたちを中心にして活発化しています。またＵＲの老朽化した賃貸住宅団地の空き家を、民間企業や大学との協同で**リノベーション**するというプロジェクトも増えています。

視点４．地蔵と地蔵盆、そして“まちづくり”

京都の街角にはさりげなく地蔵さんが祭られていますが、この地蔵さんを中心に町内会でおこなう行事が“**地蔵盆**”です。子どもの成長を願う行事ですが、たとえ少子化で子供が減っても、町内の親睦も兼ねておこなわれている、いわばまちのコミュニティの象徴的行事＝無形文化財とも言えるものです。高校生や大学生の皆さんも、身のまわりにそんな伝統的な行事はありませんか？　また、そうした行事から見えてくるものがありますか？　身近すぎてふだん意識していないものに気づく、それがリサーチの醍醐味の一つです。

図４－６．京都の街角のお地蔵さん

例えば、佐賀市の旧市街地では、「ワイワイ＝コンテナ」プロジェクトと名付けて、商店街の空地に芝生を植えてコンテナハウスを置き、子育て主婦や子供たちのたまり場を作り、若い市民を町に呼び戻しました（図４－７）。同じ商店街で、空き商店を暫定利用の形で貸し出し、お試し販売やテストプロモーションの場にする「ひなのみせオープンシャッター」プロジェクトを行い、それをテナント誘致に結び付ける試みも続けています。これらのプロジェクトの仕掛け人は、佐賀市出身で東京にプランニングオフィスを経営する若手経営者ですが、この商店街の中に自ら佐賀オフィスと直営のカフェを構えています。

また大阪では堂島川に面した北浜地区のビル低層部の店舗が、川の堤防部にデッキを張り出させてオープンカフェにする「北浜テラス」プロジェクトを始めました。河川の堤防上を使うという極めてハードルが高い事業ですが、規制緩和の波に乗って、地元や行政とのきめ細かい調整を続けて実現しました。個々のビルごとのプロジェクトが賛同者を生み、徐々にその数を増やして水辺にテラスが繋がっています。

石垣島の「石垣港さんばしマーケット」は、離島と結ぶ定期船のターミナルに隣接する岸壁で、島の食材を必ず使用するというルールのもとで定期開催される仮設のマーケットです。商工会の支援を受けながら、地元で何らかの商売を行う若手経営者が自らの工夫と努力で続けていますが、この度石垣市の支援を得て常設化の計画がまとまりました。各地で水辺の賑わいづくりが進められていることは何度も述べましたが、既存施設の有効活用ではなく、ここでは仮設から常設へのプロセスに若い経営者たちが現在進行形で取り組んでいます。

なお、このようなプロジェクトには、住民の人たちからの**聞き取り調査**が欠かせません。インタビューやヒアリングについては『高等学

図４－７．わいわい＝コンテナ

校課題研究ハンドブック』の「Chapter６ｄ：リサーチ上級編４：フィールド調査（続）インタビュー等」などを、そしてプロジェクトの成果報告や提案説明などの際には「Chapter８：プレゼンテーションについて」などをご参考にしてください。

エリア・イノベーション：自らプロデュースする

これらの動きに共通しているのは、単に建築物を改修して店舗を誘致するのではなく、プランナー自らが事業者としてプロジェクトに参加したり、逆に事業者がセルフビルドしながら、町に関わり続けようとすることです。

彼らは巨額投資を避けて、できる限り**ローコスト**で事業計画を立てます。はじめは仲間内の小さなプロジェクトなのですが、こうした動きが徐々に支持者や協賛者を生んで、点から面へと拡大させることを目論んでいます。馬場正尊（2016）はこれを**エリア・イノベーション**と呼んでいます。今までの開発プロジェクトのように、計画する人→つくる人→使う人という流れで進むのではなく、使う人→つくる人→計画する人のながれで事業がすすみ、彼らのすべてが事業の当事者となります。

小さなプロジェクトであっても、関係者の**人的ネットワーク**を生かして、東京や大阪をはじめ全国的なネットワークを活用することが多いのも特徴のひとつです。広場、水辺、コモン、など都市デザインの必須ボキャブラリーが、その運営手法を含めて、極めてシンプルかつ純粋なかたちで計画され、実現されており、小さなプロジェクトといえどもきめの細かい都市デザインのノウハウが求められています。

４－５．エリアマネジメント

自律的マネジメント体制の必要性

都市デザインの主な対象領域である公共空間は、適切な管理運営主体による維持管理がなされなければ魅力を維持することはできません。たとえば街路は管理者の違いによって国道（１級、２級）、都道府県道、市町村道、私道に分かれています。公園も、国、都道府県、市町村が管理するものに分かれています。管理主体や管理システムの違いが、公共空間の魅力の差につながります。道路や公園などの公共施設は、本来国や地方公共団体などの公的セクターが管理責任をおうのですが、事故や災害などの危険を避けるために、市民の自由な使用を制限しがちになります。とくに街路や公園、水辺空間などではこの傾向が強いのです。魅力の高い都市デザインには管理運営の計画を合わせて立てることが不可欠なのですが、管理費を抑えるために、必要最小限の管理水準にとどめる、いわゆる「公物管理」の枠内にとどまりがちになります。

近年は規制緩和の大きなトレンドの中で、ある程度自由な利用が検討されるようになったものの、基本的な考えは変化していません。また公園などについては、**指定管理者制度**[1]の導入によって、民間事業者が維持管理を行う例が増えています。自由な発想で新しいサービスを提供して施設の魅力を向上させようとする熱意はあるのですが、管理運営に関する法律や条例の枠組みを超えることはできない上に、指定管理者制度導入の主な理由が、維持管理コストの削減にあるため、施設の魅力が著しく高まるとは期待しにくいのが現実

[1] 指定管理者制度とは、都市公園、文化・スポーツ施設、福祉施設などの公の施設の管理・運営を、株式会社や財団法人、ＮＰＯ、市民グループなどに業務委託とは異なり、包括的に代行させることができる制度です。地歩自治法の一部改正（2003 年９月施行）によって実現しました。

です。

また都市再生プロジェクトが進展するなかで、民間敷地や建築などの私的領域を公共的に利用する機会が増えています。所有者である民間企業などは、一般に開放する中でも、管理責任を問われるわけですが、ある程度のコストをかけてでも、場所の魅力を高めて集客につなげようとし始めています。また各企業が個別に自分の敷地内だけを整備して賑わいを囲い込むのではなく、共同で連続したにぎわい空間をつくり、一体的に維持管理して地区全体の魅力を高める試みが増えています。さらに地方公共団体から街路や広場や公園などの管理を受託し、民間敷地内のオープンスペースと一体的な管理システムを構築することによって、地区全体の魅力を高める事例もでてきています。

このように、地区における良好な環境や地区の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者などによる自主的な取り組みのことを、**エリアマネジメント**と呼んで、大都市の都心部を中心に積極的に取り組む事例が現れてきました。オープンスペースの共同管理だけではなく、市街地開発と連動した街並み景観の誘導、地域美化やイベントの開催、広報などの地域プロモーションの展開といった取り組みなどを地権者たちが共同で行うことによって、「コモンズの悲劇」を未然に食い止めるとともに、地域間の競争力を高めようという狙いがあるのです。

国土交通省は、エリアマネジメント推進マニュアル[2]というものを公開し、エリアマネジメントの項目として、イベントやキャンペーンの実施、公共空間の維持管理、駐車場・駐輪場の共同運営、地区内の情報案内システムの構築とコンテンツの管理運営、街のブランド力の維持・向上などを示しています。運営体制としては、地権者らによる協議会組織を立ち上げ、分担金を徴収するのが一般的ですが、さらに広い範囲から賛同者や活動団体を募るために、協議会とは別にＮＰＯを組織する事例もあります。こうした組織での活動は、地権者と建物所有者、テナント、従業員、来街者間の信頼感を強化する効果も大きいと思われます（図４－８）。

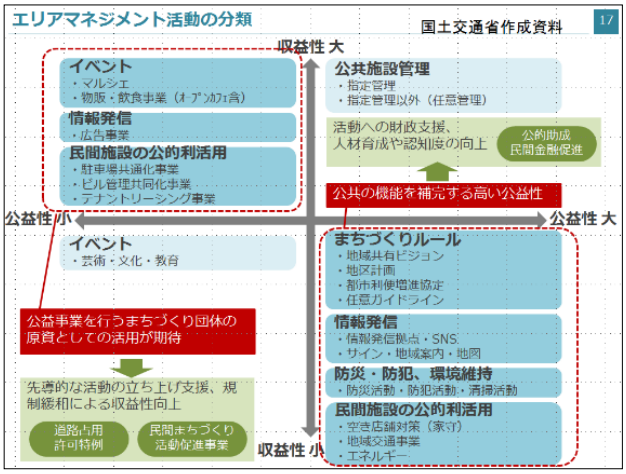


図４－８．エリア・マネジメントのシステム

４－６．引用文献

馬場正尊『エリア・リノベーション』学芸出版社、２０１６。
フロリダ・R（井口紀夫訳）『クリエイティブ・クラスの世紀』ダイヤモンド社、2007。
フロリダ・R（井口紀夫訳）『クリエイティブ都市論』ダイヤモンド社、2009。
関西学院大学総合政策学部編『都市・環境・エコロジー』関西学院大学出版会、2017。
Klassen L (1982) Transport and Reurbanization, 1982.

2018年3月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部

[2] 国土交通省土地・水資源局『エリアマネジメント推進マニュアル』国土交通省、2008。

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter５ａ　地域の良さを見直す～奈良を対象に～

このChapterでは、高校生などの皆さんを対象に『都市、環境、エコロジー』（関西学院大学総合政策学部、2017）から、清水陽子先生の「地域資源の再評価と市街地における新たな土地利用の可能性」を取り上げ、「地域の良さを見直す」ためのリサーチワークを紹介します。

５－１．地域資源とはなにか？

地域資源とは何を指すのでしょうか？　高校生や大学生の方は、この言葉を聞いて、何を連想しますか？

近年、さまざまな地域において活性化の一助として、身近な生活環境の中に織り込まれている行為や習慣、行事などを見直し、発信することがおこなわれています。そのような地域の何気ない景色、習慣、寺社、また地域コミュニティこそが地域資源なのです。

こうした地域資源を核として、外からの来訪者を呼び込む**観光スタイル**も増えています。その地で芸術文化を鑑賞したり、歴史を学んだり、地域の食文化に触れたり、環境保全に関わるなど、多様な「体験」としての観光です。こうした変化を、阪南大学教授の吉兼秀夫は『**みる観光　→　する観光　→　しる観光　→　ひたる観光**』とまとめています（吉兼、2008、2010）[1]。地域を「**地**と**図**」に例えてみましょう。きっかけとして、初めての客でも分かりやすい**アイコンを巡る**観光があり、やがて魅力的な**「図」を演出**するようになり、それを誰れにとっても快適な**「地」の保全・創造**につなげ、やがて**地そのものを楽しむ**スタイルに変化させていくのです。

このように地域を見直す手立てとして、多くの大学が地域貢献活動やフィールドワークに取り組み、大学生の感性を活かした地域づくりや課題の発掘、そして新たな観光提案などに日本各地で取り組んでいます。ここでは奈良を事例とした地域資源再評価の取り組みと、取り組みの主体である学生と地域への効果を紹介しながら、高校生や大学生の皆さんが課題研究や探求学習などで、“地域資源”の存在に気づき、それを発信することで地域再生につなげていくヒントにしていただければと思います。なお、フィールドリサーチの進め方については、『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter６ｃ　リサーチ上級編３：フィールドワークについて』を参考にしていただければと思います。

５－２．生活観光という視点
～奈良女子大での取り組み～

このChapterでとりあげるのは、奈良女子大学において「**古都奈良における生活観光**」というテーマで、平成19年度に文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代ＧＰ）に採択されたプロジェクトです。以下、「生活観光現代ＧＰ」と略称で呼びましょう。

---

[1] 吉兼秀夫「地域を元気にする観光教育のあり方」『観光ホスピタリティ教育』3:70-80、2008。
吉兼秀夫「観光における「図と地」論」『観光研究』22(1): 4-7、2010。

この生活観光現代ＧＰでは、地域の身近な生活環境を観光資源として再評価することと、それによる地域の活性化を「**生活観光**」としました。奈良女子大学が立地する古都奈良という観光地域の中で、学生自身が「生活観光」に関する課題を発見し、それに取り組み、成果を地域や観光客へと発信するという実践的な学習を行う取り組みです。生活観光の発展は、地域資源の価値を高め、新しい奈良像の形成に直結します。そこで、地域の人々とともに地域資源の発掘と再評価を行い、それらの資源をコンテンツとする新しい観光を設計することで、地域づくりに貢献していくことを目指したのです。

それでは、生活観光を奈良にあてはめると、どんなテーマが考えられるでしょう？　このプロジェクトでは、（１）地域資源として、**発掘されていない歴史遺産や祭り、芸能、特産物**などがある。（２）歴史的景観や奈良公園のような**市街地と自然の共生**が存在している。さらに、（３）旧市街地には、歴史的景観とともにそこでの**暮らし**が残っているなどの特徴に着目しました。これらは、まさに地域資源であり、新しい観光の資源となりえるのです。しかし、奈良の人々にとっては、こうした観光資源は身近な生活環境のなかに織り込まれており、それらへの認識は「当たり前」のものであり、資源であることにもなかなか気づかないのです（大石ほか、2009）[2]。

視点５―１．“よそ者”の眼で、地域の魅力をさぐりましょう！

あなたの“まち”にはどんな“観光資源”があるでしょう？　実は、住民の方々にとって、日頃から目にするものはあまりに当たり前で、その価値になかなか気がつきません。離島や過疎地で島興し／まち興しにかかわる方に、都会からＵターンした人、都会から住み着いた人が多いのもそのためです。よそ者になったつもりで周辺の資源を探してみましょう。

地域の再評価と情報発信をめざす

このプロジェクトで重視したのは、参加する学生にいかに地域を見直し、情報を発信してもらうか、ということです。　そこで、授業の目的として、以下の３点を設定しました。

①奈良の地域資源の発掘、**再評価**を行なう
②観光情報の発信に必要なデータの**収集方法**を身につける。
③観光による地域の**活性化**、**地域づくり**への関心を深める。

具体的には、地域の見直し・再評価を行うため、観光ルートを企画します。そして、その成果を発信するものとして、Web でのホームページ作成を行い、実際に期間をくぎって公開することにしました。

その第一段階なのですが、「路上観察で歩く奈良」というタイトルで、既成の観光コースではなく、学生の目から見た新しい奈良の魅力を提案してもらいました。はじめに奈良女子大学周辺（**ならまち・きたまちエリア**）のまち歩きをおこないました。もっとも、そこには「**手掛かり**」が必要です。高校生や大学生も、まったく何のヒントもなしに、フィールドリサーチを始めることは難しいと思います。そのあたりは、先生方にぜひご用意いた

[2] 大石理子・清水陽子・中塚朋子・森田尋子「地域資源の発掘とその情報発信に関する実践的教育と活動支援～「古都奈良における生活観光」という視点から～」『奈良女子大学文学部　研究教育年報』6:73-83、2009。

だきたいと思います。お仕着せではなく、学生・生徒の皆さんからの**自主性**を引き出すための手掛かりです。

本プロジェクトでは、平成 18 年度より実施されている「はじまりは正倉院展」スタンプラリーのコースを参考としました。まず、その既成コースの検証から始まります。そのコースので、自分ならではの奈良の切り口を探り、体験と観察を通して、身近な生活環境の中の観光資源を発掘しようという試みです。企画するコースは、スタンプラリーを意識して「**奈良国立博物館を出発し、近鉄奈良駅に到着２時間以内のもの**」という具体的な枠組みを設けました。さらに、企画にあたって一般市民向けの解説を付けくわえ、プレゼンテーションを意識した成果物を要求しました。

視点５―２．リサーチには“手掛かり”が必要！

いきなり“まち”の“観光資源”を探ろうとしても、どこから手をつけてよいかわからない方も多いかもしれません。そんな場合、何か“手掛かり”を探しましょう。例えば、下記で紹介する奈良の観光コースでは、“鬼瓦”でもよいかもしれません。そこでふっと何かに気づき、その背景や時間軸を探っておもしろいストーリーを考える（鍾馗さんはどこから来たのか？　奈良で何をしているのか？、などなど）。そんな情報で“よそ者”の関心を誘うとともに、日頃見慣れている土地の人にもあらためてその意味を問い直す。そんな手掛かりとして、まず、身のまわりの既成のコースを調べてみましょう。

実施してみると

この取り組みでは、各自が設定したテーマに則したポイントでまちを観察することに加え、コースを時間内に歩き終えるためには、どのルートを行けばよいのかを、時計で確認しながら何度も検討するなど、かなり実践的な取り組みになりました。学生はそれぞれ自分の興味や専門を活かしたコースづくりを企画し、まちを歩きながら**観光ポイントを発掘**しました。コース設定のために、文献を探し、昔話の由来となったところを訪れたり､自ら瓦づくりなどの体験に参加したり、観察対象に選んだものの所有者にインタビューするなど、体当たりでの取り組みも見られました。これらを通して、学生たちは奈良の身近な生活環境の中に織り込まれている観光資源を発掘・再評価し、新たな観光コースづくりをおこなうことができました。

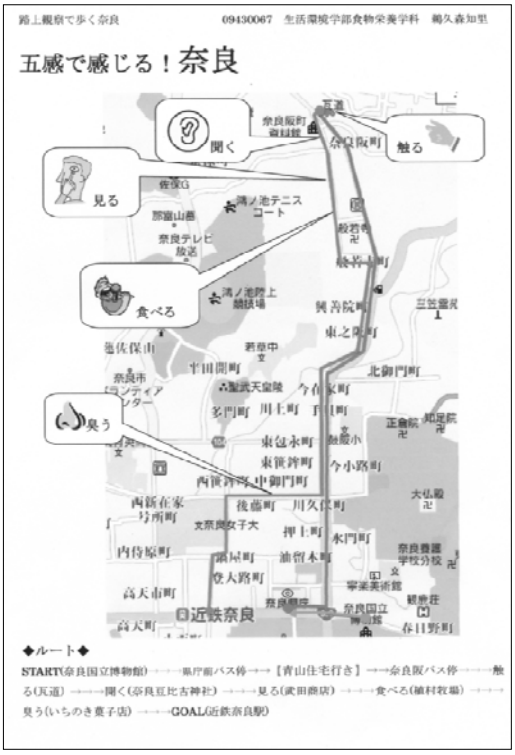
学生作品①:上を向いて歩こう～瓦鐘馗さんと出会えるまち　きたまち～

また、強調しておきたいのは、ご協力下さった**地域の方にも地域の再発見、地域づくりへの関心を深める**ことができたことです。学生の関心に対し､「なんでこんなもんに」ということもあったと思いますが、根気よくお付き合い下さり、新しい視点を楽しんで頂けたと考えています。学生は各自の企画について中間発表・最終プレゼンテーションにおいて他者から意見を頂いたことで、新た

な視点や発見を学び、地域の方は身近にあるもの、当たり前になっている事柄を見直し、お互いに刺激を受けることできたのではないかと考えます。

このプロジェクトにたずさわった学生たちも、自分の成果をもとに友人や奈良に観光で訪れた人を案内したい、奈良を知ったことにより自分の地元との違いを改めて意識した、という意見が出ました。これは地域の見直しができていることであり、本事業の目的である「観光による地域の活性化、地域づくりへの関心」に繋がり、ひいては地域への愛着心を育むことができたのではないかと考えています。

こうしたフィールド・リサーチのあとで、めいめいの観察結果を持ち寄り、整理・分類・体系化するのには、**ＫＪ法**などが役に立ちます。関心がある方は、『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter２　リサーチの進め方とテーマの深め方」（p.8）などをご参考にして下さい。



学生作品②：五感で感じる！奈良

発掘されたコンテンツについて

一方で、「奈良という観光資源の多いまちの中で、これまでにない観光ポイントを発掘する」のは予想以上に難しいものがあり、特に入学間もない学生は、ステレオタイプのコースを「自分の視点」として提案してくる場合もみられました。そのためにもはじめに既成コースのまち歩きをおこなって、「ここはもうすでに観光ルートとして企画されたコースですよ」と伝えたつもりでしたが、その意図が伝わりきれなかった面がありました。

しかし、そんな中にも学生の提案にはどこか**オリジナルの視点**が含まれ、どんな企画が出てくるのかはちょっとしたサプライズであり、指導する側も楽しむことができました。

成果の事例として学生作品①と②を紹介します。①は「**上を向いて歩こう～瓦鍾馗さんと出会えるまち　きたまち～**」と題し、メインの観光ルートとなっているならまちの北にある**きたまち**に着目し、民家の屋根に掲げてある**鍾馗さん**を巡る提案をしています。鍾馗さんとは鬼を追い払うとされ、京都・奈良などに見られる伝統的な厄除けです。奈良ではＴ字路の正面や寺・神社の前に面する住宅の屋根に多く見られます。

②は「**五感で感じる！奈良**」です。これも①と同じ**きたまち**を対象とし、体験型の観光ルートの提案をしています。飴の製造を行っている作業場近辺を「**嗅ぐ**」、牧場でのアイスクリームを「**食べる**」、川のせせらぎを「**聞く**」など、五感に訴える地域資源を発掘しています。このどちらのルートも対象地をピンポイントで示すことはしませんでした。鍾馗さんなどは個人の住宅にあることがほとんどであるため、個人情報に配慮したということもありますが、大まかな位置を示すことで探す楽しみも味わって欲しいとの狙いもありました。この便利な社会の中であえて不便を感じてもらい、その分見つけた時には喜びを感じるのではないかと考えました。

（後編に続く）

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter５ｂ　地域の良さを見直す：奈良を対象に後編

５－３．情報発信

どのように発信していくか？

さて、情報を掘り出しただけでは、プロジェクトは完結しません。これらの情報をいかに発信していくのか？　本プロジェクトでは、一般の観光ガイドブックに掲載されるような多くの人が思い描く奈良のイメージとは異なる側面に光をあて、学生独自の視点や表現によって奈良の新しい魅力を発掘し、メディア（**Web**）を介して広く紹介することに取り組みました。とりわけ、地域というローカルな受け手のみならず、**広域の受け手**に向けて情報を発信できる点が、Web 上に作品を発表することの利点であると考えました。同時に、インターネットに関する知識やコンテンツの企画・立案・制作について重点的に学ぶことは、今後の職業・技能上の経験として様々な分野にも応用していくことが可能であり、必要なスキルになると考えました。

発信する内容は、先ほどの「路上観察で歩く奈良」で得た「生活観光情報」をベースとしました。一方、奈良は有名な歴史的建造物が建ち並び、文化財が豊富な土地柄です。まちの魅力を紹介するには事欠かないのですが、Web サイトに情報公開する際、画像掲載などに十分な配慮を必要とします。個人を写真で撮影した場合においても、同様に情報の取り扱いに十分な配意が必要です。もちろん、事前承諾や画像の加工に留意するよう指導する必要があります。著作権やメディアリテラシーも確認しなければなりません。そうした意味でも、SNS など情報を発信する機会が増えている今日、高校生や大学生の皆さんが身に付けてもよいかしれないスキルです。

なお、調査結果の報告や新たな提案などをされる場合、プレゼンテーション・スキルとして『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter８：プレゼンテーションについて」などを御参考にしてください。

視点５―３．“発信”についての技術的側面

みんなが集めてきた情報をＷｅｂサイトとして公開するには、多少の技術が必要です。ここで紹介した例では、“Kompozer”や“ez - HTML”などのホームページ作成ソフトを用いて制作しました。ＨＴＭＬを生徒さんや学生自身で記述するためには、基本的な HTML の文法を学びながら、Web サイト制作に取り組むことが必要です。とくにWeb サイト制作技術については専門的な知識を持った方に相談することで、実践的なスキルを習得できる機会にもなるでしょう。

具体的なコンテンツ

成果として学生作品③④⑤を紹介します。

③は「**専門見地奈良**」と題して大学教員など各専門の視点からみた奈良についてインタビュー形式でまとめています。理学部の教員が案内する奈良公園編では、鹿によるディアラインやイラクサの変化などを解説し、その際に植生を専門とする教員の「（ある植物をさ

学生作品③：専門見地奈良

図５－１．身代わり猿とその吊し方

して）僕これ嫌いなんだよね・・・」というちょっとしたつぶやきを取り上げるなど、人となりまでが伝わるような構成となりました。

④では「**ならまちのおまじない**」として、奈良町に伝わる**身代わり猿**[1]と節分の厄除けである“**ひいらぎいわし**”の由来と分布を調査し、町別に掲載し、それぞれの地区をクリックすると写真などを見られるようになっています。身代わり猿もひいらぎいわしも奈良の伝統的な厄除けですが、身代わり猿は右の写真のように家族の人数分を吊すものなので、家族の人数を知られたくないなどの理由で最近では取り組む家庭は少なくなっています。

ひいらぎいわしは節分に鰯の頭をヒイラギの枝に刺し玄関先に出しておく、というものですが、これも猫やカラスが来て迷惑をかけるから、などの理由のため節分の一晩だけしかしない、という家庭が増えています。奈良の歴史的地区である奈良町近辺ではまだその見ることができますが、その数は減ってきています。

⑤は「**奈良・寺のすゝめ**」として、お参りの仕方やどのような特徴があるかなどの解説と、季節やイベントなどテーマごとにお寺の楽しみ方を紹介しています。民俗学の教員からお寺の選定などの助言を頂き、学生自身も祭りへ参加して情報を収集しました。どれも学生ならではの視点で構築されており、Ｗｅｂとしての質は未熟ですが、面白いコンテンツとなりました。

左：学生作品④：ならまちのおまじない
右：学生作品⑤：奈良・寺のすゝめ

５－４．取り組みから得られたもの

最後に、このプロジェクトから、何が得られたのか、まとめましょう（大石ほか、2009）。こうした地域活動を推進する大学や高校は全国にあって、数多くの取り組みがなされています。しかし、そのような活動を指導できる専門家は少なく、多くの大学や高校では手探り状態で進めたり、あるいはいっさいを学生や生徒さんに任せきりで行われているものも少なくありません。

そこで、学生や生徒さんの自主性を尊重しながら、しかし、すべてを任せきりではない指導の仕方も意識して、以下のようにまとめてみました。

（１）“**多様性に富んだ視点**”の尊重：このプロジェクトに協力いただいた先生方は複数の学部に所属し、専門も社会学、生物学、建築・住環境学、都市計画と多岐にわたっていました。それぞれの分野では専門家ですが、異なる方法や視点を持ち合い、おのお

[1] 身代わり猿：「奈良町の家の軒先に赤いぬいぐるみがぶら下がっている。これは、「庚申（こうしん）さん」のお使いの申（サル）をかたどったお守りで、魔除けを意味し、家の中に災難が入ってこないように吊るしている。災いを代わりに受けてくださることから「身代り申」とよばれている。また、背中に願い事を書いてつるす「願い申」ともいう」（奈良町資料館ＨＰ；http://naramachi.co.jp/migawarisaru）

のの長所を活かすかたちで、地域資源の発掘や情報発信の手法を編み出すことができました。高校でも、様々な分野の先生方がご自分たちの専門知識をだしあい、チームを組んで指導されることが大事かもしれません。

学生たちもまた多様性に富んでいました。とくに、全国各地から進学してきた学生さんは、自分の出身地と奈良の違いに新鮮な驚きをもって大学生活を送っています。逆に、地元出身の学生たちも、長年奈良に住みながら、まだ行ったもみたこともない場所や、知らないことがらがたくさんあることに気づきました。ようするに、せっかく奈良に来たの（居るの）だから奈良について学びたい、という思いを持っている学生は多くいるのです。もちろん、これは奈良に限ったことではなく、どんな地域にも当てはまることです。

これは“**目線・視線・立ち位置**”の問題でもあり（視点５－１；34 頁参照）であり、かつ、他者の視線によって、それまで当たり前に見てきたものに対する見方が変わってくるということでもあります。当然、複数の観察者がそれぞれの印象を提示して、それを統合していく作業が欠かせません。そしてそこに観察者の皆さんの多様性（男女、出身地、それまでのライフ・ヒストリー、そして国籍や言語の違い）を尊重しながら、それらの意見を集約してストーリーを形づくっていくことになります。

（２）**自主性**：次は、学生さんたちの自由な発想や関心＝**自主性**に委ねたことです。教員は各専門で培ってきた視点や方法に基づき、適宜、助言する体制をとりましたので、学生にとっては専門以外の視点や方法を学ぶ機会となるとともに、奈良という地域を眼差す視点 を広げる機会にもなったと思います。その結果、学生たちは自ら設定したテーマを、それらの視点や方法を参考にしつつ精力的に情報を探索し、工夫を凝らしながら独自の作品としてまとめあげました。作業の過程や成果をみるにつけ、**学生たちの底力を再認識**するとともに、**きっかけ（機会）を与えれば**、学生たちの**主体性**がいかんなく発揮されることを実感しました。

（３）**地元の人たちとの交流**：地元の人たちも気づかれることなく、生活環境の中に**埋もれている地域資源**を、学生の視点から観光資源として発掘・再評価し、それを地域情報として地域の人びとに提案することが、新しい地域のイメージを創造することにもつながっています。そうした相互交流こそがこのプロジェクトの意義であり、実践的教育や活動が活かされると考えています。それは当然、高校生や高校の活動が地域に貢献した、ということになるはずです。

なお、地元の方へのインタビュー、ヒアリングについては『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter６ｄ　リサーチ上級編４：フィールドワーク（続）：インタビュー＆聞き書き」などを御参考にしてください。

「**地域資源の発掘！**」などと振りかざしてしまうと、なんだか構えてしまったり、今更そんなことと考えたりするかもしれません。そこで触媒となってくれる一つが学生・生徒さんではないでしょうか。彼らがまずそれぞれの地域について知識をつけて、その地域がどうなって欲しいのか、を考えていくことが地域の良さを見直す一歩になると思います。どんな地域でも面白さはあります。地域を知る「きっかけ」をつくり、その情報を共有・

発信する、ということが地域の再評価に繋がります。そのような活動に学生だけでなく、市民の方が参加することで地域力の底上げになり、地域住民の満足度の向上、地域への愛着・誇りへとなるのではないかと考えます。

５－５．引用文献

関西学院大学総合政策学部編『都市、環境、エコロジー』関西学院大学出版会、2017。

大石理子・清水陽子・中塚朋子・森田尋子「地域資源の発掘とその情報発信に関する実践的教育と活動支援～「古都奈良における生活観光」という視点から～」『奈良女子大学文学部　研究教育年報』6:73-83、2009。

吉兼秀夫「地域を元気にする観光教育のあり方」『観光ホスピタリティ教育』3:70-80、2008、。

吉兼秀夫「観光における「図と地」論」『観光研究』22(1): 4-7、2010。

2018 年３月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部

Case ５－１．ケース・スタディ：ご参考に、ある大学でのフィールド調査について、参加した学生の方が書いた記録を紹介しましょう。

■第二回フィールドワーク報告（５月 16 日実施）

今回は先日実施されたフィールドワークを報告します。まず、屋根の形状が解説されているプリントを片手に、30 分くらい街中を歩きました。

「あれは切妻屋根だ」「あれは陸屋根だ」としゃべりつつ歩いていると、茅葺屋根の修繕作業をしている家を発見しました。茅葺屋根の修繕はおおむね 10～30 年に一度する程度なので、貴重なものを見ることができました。さて、街歩きも終わり、今回は伝統的街並みに詳しいＹさんをお招きして、Ｋ市の街並みについてのお話を聞きました。Ｋ市の街並みの特徴や、江戸時代からの敷地割が現在も生きていること、中門造りという珍しい建築様式の民家（Ｋ市には４軒しか現存していない）のうちの１軒が撤去され、新しいアパートが建設されていること等、スライドを用いて講義していただきました。

講義の後、町人地と武家地を分けている溝を見に行きました。何の変哲もないただの溝ですが、昔の名残がある敷地割を見ることができました。みんなが溝に見入っていました。そのあとはみんなが考えたＫ市の強み、弱み、強みを生かすための機会、その上で脅威となる存在について SWOT 分析[2]で話し合いました。みんな自分なりに一生懸命Ｋ市について調べていました。

その中で一番盛り上がったのは、かつてＫ市の領域を治めていた藩主Ｏ氏をもじった「Ｏだんご（お団子）」でした。商店街の店がそれぞれ自分の味付けをして団子を作り、協力して売り出し、商店街を活性化させようという、学生ならではといえるアイデアも飛び出ました。最後は、株式会社まちづくりＫのＡ社長とＴ市議会議長のＴさんと晩ご飯を食べながらＫ市の現状、そしてこれからのことについて話し合い、この日のフィールドワークが無事終わりました。

---

[2] ビジネスなどにおいてプロジェクトを進める際に、会社や組織、個人をとりまく内外の環境について、強み（Strengths）、弱み（Weaknesses）、機会（Opportunities）、脅威（Threats）という４つのカテゴリーごとに要因分析、もっとも合理的な経営戦略をさぐる方法です。それを“まちおこし”に適用するわけですが、皆さんも試してください。